

うちはオビト憑依忍伝

asd

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日突然、気が付いたら「うちはオビト」に憑依転生してしまった・・・。  
死亡フラグを回避し、木の葉の繁栄と忍世界の安定のため、今日も一人うまく立ち回っていく・・・。

何番煎じか判らないが、今！うちはオビト忍伝が始まる！！

# 目次

カカシとのボーイズラブなんて真つ平御	
免被る：前編	1
カカシとのボーイズラブなんて真つ平御	
免被る：後編	13
世の中の大半は予定通りにいくとは限らない。がそれが悪い方向に転ぶとは限らない	
ない	24
同盟を組んだ後すぐ裏切るのは定石	
35	
口寄せ生物は常識の範囲内で	40
忙しい時ほど悪いことが起こると言うが良いことも起こる	46
10年20年先の未来に政治家は評価される。	52
右手は嘘、左手は真実。拍手をするとどちらの音になる？	58
忍の世界で一番高く売れるのはなんだかんだで死体	64
なんだかんだで他人任せ	70
ちよつと用事がある時ほど緊急事態が入ってくる。	76
浮かないと沈むこともできない。	
81	
料理は下準備が大事	87
自分が考えることは相手も考える	

規模に応じてリスクは跳ね上がる

チャンスこそピンチ、良いことと悪いことは同時に起こる。

104

陰と陽を足して、陰陽ができあがる。

一寸先は霧 ぱーと1

115

一寸先は霧 ぱーと2

120

一寸先は霧 ぱーと3

125

一寸先は霧 ぱーと4

129

一寸先は霧 ぱーと5

134

一寸先は霧 ぱーと6

141

野菜が食べたいなら焼野菜屋に行け

忍だ

153

忍は言葉の裏の裏を読み

161

師は強し

166

第28話

172

背中を押すのではなく、蹴っ飛ばせ

第30話

180

同盟関係ってそんなに大事なな…

# カカシとのボーイズラブなんて真つ平御免被る：前編

一人の少年が全力で森の中をかけていた。うちのは装束に右側頭部を隠す様につけられたぐるぐる巻きの木彫りの仮面。背中の錫杖。うちはオビト13歳である。無論、憑依転生者だが。

彼にとってこの任務を外されるわけには行かなかった。この任務で野原リンを誘拐され、それを追跡しなければうちはマダラの潜む基地への入口がわからないからである。

ここでマダラを叩いて、黒ゼツ誕生阻止と柱間細胞入手と、ついでにカカシにやる用の写輪眼をマダラから回収しなければならないので、なんとしても任務に参加しなければならぬ。それこそ最悪神威の使用も辞さない覚悟である。ただ最近視力の低下を感じるのでススイが万華鏡に目覚めるまではできれば使いたくない。

森を抜け、三人の忍びがいるところに突っ込んだ。

「間に合ったか」

「アウト」

オビトに突っ込んだのは白髪に布で口と鼻を覆った忍びだった。

「んーまあいいじゃないか、カカシ。オビトが遅刻するなんて初めてだしね。神威を使わないようにしてるから時間の調整が難しいんだろう」

岩に座っていた黄色い髪がカカシを諫めた。今にも背中に四代目とか背負いそうな雰囲気である。

「ミナト先生、妙にオビトに甘くないですか」

カカシはジト目でミナトを見る。ミナトは微笑み、返した。

「オビトはこころしばらくは最前線で神威を使って敵の数を調べてたり、物資を時空間に飛ばして奪ったりして大変だったんだよ。すこし位甘やかしたって上げないとね」

オビトもミナトに追隨した。

「そくです。おまえマジ大変だったんだからな。綱手様がドクスタかけてくれなかったら、俺失明するまで三代目に働かされてたぞ」

オビトの反論に反応したのは、今まで苦笑いをしていた女の子だった。

「オビト。目の調子は大丈夫なの？」

「リンちゃん。俺に優しいのは君だけだよ」

「俺は？」

「甘やかし宣言をしたのにさらりと無視されたミナトは思わず突っ込んだ。」

「リン。今日は俺にとって特別な日なんだから、あまりオビトを甘やかさせるな」

「あ、上忍になったんだっけ。まあ、俺からすれば木の葉が未曾有の戦力不足じゃなかりやなれたとは思えないけど」

オビトに皮肉にカカシは思わず握り拳が震える。

「カッチーン。人が気にしてることを」

「自覚はあったのか」

そうつぶやいたのはミナトだった。

「ミナトせんせえ!？」

尊敬する師の一言に愕然としたカカシはツツコミの声が思わず裏返った。

「んーじゃあ、もうそろそろ任務の説明を始めようか」

ミナトは地図を取り出し、それを四人で囲う。

「このラインが岩隠れが草隠れを侵略しているラインね。で、情報では千人規模の忍者がここにいらっしゃるらしい」

カカシが記憶にある前回見た地図と比べ、呟く。

「あまり前進していませんね」

「そう。オビトが片っ端から支援物資を奪ってくれたおかげで後方支援が行かず、かなり足止めでできている。で、オビトがドクターストップをくらったから、今のうちに後方支援を遅らせるために神無畏橋の破壊をする」

「潜入ミツシヨンになりますね」

そう。とミナトは頷くとオビトは先生は？と尋ねた。

「俺は直接前線を叩く。君たちの陽動にもなるしね。国境まで是一緒に行くけどそこからは任務開始だ」

カカシを先頭に進んでいるとカカシが手を隊を止めた。

(一人・・・)

「影分身だろうけど、20人いるね」

オビトもそれを踏まえて推測を上乗せする。

「Aランク禁術が使えるなら相手は上忍な可能性は十分ありますね。カカシ、どうする？」

カカシは一つ頷くとミナトの方を向いた。

「先生、俺が突っ込みます。援護をしてください」

「焦つちやダメだよ、カカシ。ここは俺が行く」

しかし、カカシはそれに頷かない。

「先生、今日の隊長は俺でしょう。ちようど開発中の術を使ってみたいんです」



そういったカカシに反論したのはオビトだった。

「カカシ。それは今しないといけないことか？」

「ミナト先生がいる今だからこそ、なんだ」

どちらも正論と言えなくもない。ミナトは頑ななカカシに一つため息を付くと、クナイを構えた。

「千鳥!!」

カカシは右手に雷遁のチャクラを集中させ猛スピードで突っ込んだ。それに対し相手の忍びは手裏剣やクナイを持って遠距離から迎撃する。バックアツプに回ったミナトは影分身10名以上から放たれる手裏剣をたっただひとりで全て撃ち落とした。

オビトはすぐそばの地面からずりりと現れた影分身に背中の錫杖を引き抜いて叩きつけるが、岩隠れの額あてをして忍は腕を交差させて防いだ。しかし、次の瞬間にはオビトは錫杖を引き抜き、否。鞘を残して錫杖を引き、その首を刎ね飛ばした。

切れ味を落とさぬために火遁をもって油脂を焼き消した。

オビトが視線をカカシに戻すとちょうどミナトが助けに入ったところだったようだ。文字通り一瞬にして現れ、オビトたちの元へと戻ってきた。

そして、リンが傷口を見ようとカカシに近づいた瞬間にはカバンのみが残り、再びその姿を消した。

「マーキングすんのはえなあ」

オビトは思わずといった風につぶやいた。

原作において先手を打つのが上手いと褒められていたが、どちらかといえば手癖が悪いというべきだろう。もしかしたら歴代火影でこの人が一番狸かもしれない。そう素直に思った。

リンがカカシの治療をしている時にミナトはびよんびよんと戻ってきた。

「カカシの怪我も軽くないし、一度後退して立て直すよ」

「大丈夫です！」

ミナトの示した方針にカカシは大きな声で反対した。

「大丈夫じゃないだろう。てかあの術なんだ！雷影も真似か!? 欠点あからさまじゃねえか、あああん!!」

一度止めたのに怪我をしたカカシにオビトは半ギレだ。

「ちよ・・・やめなよお」

切れているオビトをリンが止める。

神妙な顔をしていたミナトがカカシに切り出した。

「カカシ。さっきの術だけど、もう使わない方がいい。突破力とスピードはあるけど、スピードに振り回されてカウンターに対応できない不完全な術だからね」

「……………」

オビトにミナト、二人にダメだしされてカカシはぐうの音もでない。

「じゃ、分かれる前に言っとくけど。忍にとつて何より大切なのはチームワークだからね」

その後、カカシを隊長とする4人はカカシの怪我を治しつつ進んだ。しばらく進み、植生変化し始めた頃合を見て、ミナトは二手に分かれることを決めた。

「ここから二手に分かれるけど。みんな気をつけてね。昨日の敵は偶々、単独での偵察だったようだけど、これからはチーム戦になると思う。三人組から四人組で動くのが基本だから二人から、ヘタをすれば二小隊と考えて7人程度。間違えても独断専行しないようにね」

そう言ったミナトにオビトは手を上げて発言した。

「せんせー。昨日の敵生きたまま捕まえてくれれば俺の写輪眼で情報引き出せたと思う

んですけど」

「……ごめん、忘れてた」

ミナトはしまった、と言わんばかりの顔でオビトに謝った。

「ん、じゃ。散！」

ミナトとカカシ班は瞬身の術で二手に別れた。しかしカカシたちはすぐに一度立ち止まる。

「で、隊列はどうする？」

「そうだな。敵戦力も不明だし、鼻のある俺か、写輪眼のあるオビトが前なんだが」

チャクラ量に自信がないわけではないが、オビトとしては不必要にチャクラを使用したくない。他の探知能力もあるにはあるがそちらもチャクラを使うので却下。

「写輪眼を維持し続けるのは無理とは言わんがチャクラの無駄だぞ」

「だな。潜入任務だから後ろにも気をつけなければいけないから、オビトは後ろを頼む。医療忍者のリンは双方にすぐに援護に回れるように真ん中ね」

隊列を維持しながら休憩をしたり、怪我の治療をしたりして、敵地を進んでいく。

しばらく進んでいると川の途中でカカシが敵の存在を感知し、手を掲げることで仲間へと伝えた。

次の瞬間、オビトたちに大岩が投げ込まれる。

オビト、カカシ、リンはそれぞれの方向へと飛び大岩を避けた。しかし

((分断されたッ!!))

そう思った次の瞬間には、それぞれに刺客が襲いかかる。

カカシは両手の甲に刃を付けた男の一撃を躲し、背中のチャクラ刀に雷遁を流し、斬りかかる。男は両手の剣で防ごうとするが、チャクラ刀に剣は両断される。しかし、身体を逸らし、チャクラ刀が胴に触れるのは避けてみせた。

オビトは飛んできた鎖付きの分銅を水遁・水陣壁で防ぎ、そのまま水遁・水鮫弾の術へと繋げようとするが、分銅は水陣壁を突破しオビトの顔へと迫る。オビトは顔を逸らし躲すが、面にかする。しかし、面はかすただけにも関わず、大きくえぐれる。

オビトはすぐさま写輪眼を発動し、鎖を確認する。が、それ以上にやばい状況が写輪眼に映し出される。

「リン!! 下だ!」

オビトはリンの下に潜み、水牢の術を発動させたくノ一を見つけ、警告した。しかし、リンは水牢の術に囚われた。

「チッー！」

オビトは思わず舌打ちし、自らの敵を見据える。水牢の術を使っているのならば動けはしない。リンが気を失うまでに一人は仕留める。

錫杖の刀を抜き、火遁のチャクラを流した状態で分銅を放った敵の首を斬りつける。しかし

ガツ、ガリガリガリガリ、ペキンと音を立て錫杖の刀が折れる。

(土遁・土矛の術か、ならさつきのは土遁・加重岩の術か)

土遁と水遁は優劣関係にある。分銅が水障壁の術を破ったのは当然の道理だったということだ。

交差した二人は振り返り、再び対面する。

しかし、岩隠れの忍はうかつだとしか言い様がない。写輪眼を相手に目を合わせるなど愚かとしか言い様がない。

オビトは次の瞬間には相手を幻術にかけ、リンの元へと向かった。

しかし、戦いの最中吹き飛ばされてきたカカシにぶつかり、もんどりうちながら二人転げまわる目にあつた。

「カカシ、しつかせいや！」

叱咤されたカカシは頭を抑えながら呻くように行つた。

「あの男、かなりの早業だぞ」

「相手かえんぞ、俺がやる。寝転んでんのは土遁使い雷遁でいけ」

オビトはそれだけ言うと両手に剣の男へと向かった。カカシはカカシでリンの救出へと向かう。

「へ、返り討ちにしてやんぜ」

両手に剣の男は余裕そうに構えるが、オビトの写輪眼を見てすぐに警戒をした。

男はかなりの早業でオビトも写輪眼をフル回転させ斬り結ぶ。しかし、何よりも評価されるべきなのは写輪眼に目を合わせずに斬り結ぶその技術である。

しかし、それとて憑依転生者オビトに勝つには生ぬるいと言わざる終えない。

男はオビトの強烈な体当たりのような斬りつけに弾き飛ばされる。男は空中でくるりと一回転し、木の枝へと着地しようとするが、するりとすり抜けてしまう。

「なに!?!」

驚愕している男にオビトは火遁で止めを刺す。

「さよーなら」

火遁・火蜂筵の術。大量の針状に変化した火によって男は蜂の巣にされた。

カカシは水上でくノ一とお見合い状態になっていた。しかし、くノ一のそばにはリン

と幻術にかけられた男がいた。

「カカシ。何やってんだ」

「オビトか。この女、血型限界だ」

くノ一は興味ありげにオビトをみた。

「あの子をやるとは中々ね。さっきの幻術も見事だったわ。貴方がこの小隊の隊長さんかしら」

小隊長と間違えられたオビトは気まずそうにカカシをみやり、無言で構えた。それだけで伝わったのかくノ一は、そう、とだけ呟き。印を構えた。

溶遁・溶霧の術。口から吐き出された霧は広がりながら二人に迫った。

二人は大きく後退していった。その間にくノ一は男にかけられた幻術をとき、リンをつれてその場から消えた。



# カカシとのボーイズラブなんて真つ平御免被る：後編

カカシと共に酸霧を払いながら元いた場所に戻ると、くノ一たちの姿は消えていた。

リンを救出しないといけなのだが、オビトとしては助ける理由は薄い。というのも予定が狂いすぎているからである。第一に敵の隊長が違う。おそらくあの女が小隊長だろう。となれば使っている拠点も違う可能性が高い。第二に別にリンが好きというわけじゃない。と言うことである。

しかし、それらを退けるほどの大きな助ける理由がある。つまり、イレギュラーがあるとも知らず、誘拐されたリンを助ける理由として用意しておいた起爆札である。橋を落とすための起爆札をあらかじめ全てリンにもたせていたのである。要するにカカシは助けに行く気満々ということだ。まあ、それに知り合いだしね。助けに行くことに不満はない。友達だしね。別に大事じゃないけど、大切だしね。

実はちゃんと予備の起爆札を時空間に用意してあるけど、其の辺は黙つといて助けに行くでしょう。

「……でカカシ君に問題」

「なんだ」

いきなりの問題にカカシは冷静に応じる。これ自体が一種の確認である。冷静なカカシをみてオビトは問題を提示した。

「今回の人質奪還の際に気をつけなければならぬことは？」

カカシは少し考えると答えを出した。

「人質が変化の術かどうかの確認だろう」

「外れ。そんなもんは写輪眼を使えば一発でわかる。正解は人質にトラップが仕掛けられているかどうかです」

オビトは一本一本指を立てながら例を上げていく。

「まず、起爆札、一番お手軽で誰にでもできる。次に道連れタイプの術、特殊な血統を必要としないものも存在し、上忍クラスならできて不思議じゃない。最後に法陣トラップ、高等忍術だが、今回に限ってはこれだとありがたい。写輪眼があれば地面に隠れても見つけられるし、見つけさえすれば解除は容易だ」

「だが、あのくノ一はどうやって倒すんだ」

通常ならば当然の疑問。しかし、オビトにとってはそれこそ愚問だ。そんなもんは「神威で吹き飛ばしてしめえだよ」

とか思ってた時期が俺にもありました。なんでこんなとこにいるんだよ

A & B

あーんどミナト先生よ。

状況は思った以上に混沌としていた。死んでいる岩隠れのくノ一とオビトが幻術にかけていた忍。ミナトのそばにいる目が虚ろなリン。なぜかいるエーとビーとその他雲隠れの忍1名。

なんでこんなところにいるんだ？雷の国からここまでは国を五、六個超えてこないといけないはずなのだが。

取り敢えずとカカシとオビトはミナトのそばに着地する。

「カカシ、オビト。無事で何よりだよ。オビト、カカシとリンを時空間に取り込んで、常に神威を維持しておくんだ。カカシは中でリンの幻術を解いておくように」

二人はこくりと頷くとオビトはカカシとリンに手で触れ時空間に取り込んだ。

それを感じ取ったミナトは周りへとクナイを飛ばした。

「オビト、真ん中の大男はきかん坊のエーだ。一瞬たりとも気を抜かないように」  
オビトはミナトの前に立ち、印を組む。

火遁・豪炎呵責。親指の無い握りこぶしの様な形をしたこの術は火遁・豪龍火の術に匹敵する威力を持ちながら印が一つ少ないのが特徴で、オビトの悪ふざけによつて生み出された術なのだが、実用性は高い。

豪炎はエーたちに向かうが三人共が見事に躲した。

エーたちは次の攻撃に備える。三人を追撃するように特徴的なクナイが飛んでくるが、雲隠れの忍が巻物を取り出し、大量の忍具を口寄せし、クナイを全て迎撃した。  
が、雲隠れの忍は背をクナイで刺された。

「な！ アマイー！」

アマイと呼ばれた忍を刺したのはミナトだ。

「飛雷神……」

「三ノ段だよ」

オビトが眩き、ミナトが引き継いだ。神威と飛雷神の合体技。二ノ段がマーキングを施したクナイなどへの移動ならば、三ノ段は神威でマーキングが施されたものを飛ばし、それに飛雷神で飛ぶ、時空間コンビならではの技である。そして、直接神威で倒したほうが早いだろうと言った某仙人が手も足も出せずにボコボコにされた技である。

エーは次の瞬間にはミナトに殴りかかっていたが、ミナトはすぐにオビトの近くへと飛んで避けた。

「ビーー！」

エーがビーへと叫ぶがビーはそれを聞く前から煙玉を投げた。

「追いますか？」

オビトは追いはしないだろうと思っていたが念の為にミナトに確認した。

「いや、任務を優先しよう。彼らを相手にしては時間を喰う」

オビトは一つ頷くとミナトとともに、エーたちが逃げた方とは別の方角へと姿を消した。

オビトとミナトは後方を警戒しながら撤退していた。

「なーんでこんなところに雲隠れの忍がいんでしょうね」

「ん、大戦中だからね。もしかしたらどこかに同盟を申込もうとしてるのかもしれないね。このまま流れにそっていけば風の国があるしね。一応このことは火影様に報告しておくよ」

しばらく進み、後方の見晴らしが良くなったところでオビトはカカシとリンを外へと出した。

「うう、御免。捕まってえ」

落ち込んでいるリンの肩を叩いたのはカカシだ。

「気にするな。あの忍は強かった」

そしてその強かった忍でさえ、きかん坊の前には一瞬で殺されたのだろう。あの場には酸が巻かれた様子は欠片もなかった。おそらく印を組む暇さえなく殺されたのだ。

「ん。じゃあ、橋を破壊しに行こう。距離もそんなにないしね」

ミナトが切りしたが、オビトは疑問を出した。

「ミナト先生なんでこんなところにいるんですか？戦線は？」

「戦線には大蛇丸さんが来てね。後は任せてきたよ」

おかま、大蛇丸に戦線は任せてきたようだ。まあ、あの人なら簡単には死なないだろうとオビトも納得した。

カカシとリンも荷物を背負い、動ける様に準備した。それを見てからミナトたちは橋へと向かう。橋は忍の脚ならば一時間程度の場所になり、すぐに到着した。

オビトとカカシが起爆札に血をつけ、印を結んで橋へとくっ付ける。そして、爆。橋は爆音と共に崩れ、川へと落ちた。

「よし。任務完了だね。撤退するよ」

ミナトの指示を受けてオビトたちはミナトを小隊長として木の葉へと撤退し、木の葉へと戻ったオビトたちは火影へと報告する為、火影の執務室へと行った。

火影が言った言葉にオビトは頬を引きつかせてなんとも言えない顔をしていた。要するに

「うちはオビトを波風ミナト他、上忍数名の推薦を受け、戦時特例として上忍に昇格する」

大戦中に上忍昇格など、これからこき使うからよろぴこーと言われているのと大差ない。つまり、これからはバンバンAランクや最悪Sランクに単身で生かされたりする可能性があるということだ。

「おめでとうオビト。ほんとはカカシと一緒に昇格してもらうつもりだったんだけど、最近忙しそうだったから」

「今度はオビトのお祝い用意しないかね！」

「おめつとさん」

火影・ヒルゼンはうむ、と頷くとカカシとリンに三日の休日を言い渡した。

「オビト早速で悪いんじゃないが、明日から次の任務に出てもらおう。何、そう難しい任務ではないわい。Bランク任務で雨隠れの頭目、山椒魚の半蔵に親書を届けてほしいんじゃない。

頼んだぞ」

火影補佐が持ってきた封筒をオビトはぞんざいに掴み懐にしまった。

「じゃ、失礼します」

火影に一礼してオビトは執務室を出て行く。ミナトもそれに付いて出ようとしたが火影に呼び止められた。オビトは時期的に火影打診かな。と思いながら一人家へと帰った。

久方ぶりに家に帰ったオビトは玄関には向かわず、裏庭へと向かった。

「ただいま。母さん」

桃を収穫していた。母が驚いた様にこちらを向いた。

「あら、おかえりなさい。無事で良かったわ。すぐにお風呂沸かすわね」

既に四十になるのだが、その若さは昔から変わらない。元忍だけあって今も定期的な運動しており、若々しくある。

「いや、明日からまた任務なんだ。悪いけど、猫ばあのところに行くから桃のジュース作ってくれないかい？」

「そう、わかったわ。ちよつと待っててね」



母はそう言うのと家の中へと戻り、桃を一度茹でてから冷水で冷やし、皮を取ったものの種を除いてからミキサーにかけた。

オビトはその間に自分の部屋へとお金を取りに戻った。

リビングに戻るとニリットルペットボトル二本にジュースが詰められていた。

「ありがとう。ちよつと行つてくるよ。夕方には戻るから」

オビトはそう言つて家を出て、里の門で外出所要書を出し、空区へと向かった。

空区にある廃墟をしばらく徘徊していると角のところまで猫と鉢合わせた。

「おー。久しぶり、みかん。元氣してたか？腹減つてないか？干し肉あるぞ」

「相変わらずうるさい男だニ」

みかんはそれだけ言うと元きた道へと引き返していった。オビトはそれについていく。

しばらくいくと開けた場所に出る。そこには大量の猫と一人の老婆がいた。

「久しぶりだね。オビト」

「や、猫ばあ」

オビトは猫ばあに挨拶すると、部屋の隅に置いてあつた猫用の水入れにどぼどぼと桃

のジュースを注ぎ、地面においた。すると数匹の猫を残し、猫たちはジュースを飲みに行った。

「今日はまたどうしたんだい。ついこの間、来たばかりじゃないか」

あははとオビトは笑うと折れた錫杖の刀を渡した。猫ばあはそれを検分する。

「草なぎのひと振りとはまでは行かないが、鉄の国の名工に作らせた一品だったんだがね。雷遁や風遁で断たれた感じじゃないね。側面を叩かれて割れたわけでもない。何か硬いものを無理やり切ろうとしてへし折れたみたいだね」

「ご明察のとおりで、ちよつと厄介な忍との戦いで折れちゃいました。代替りのものと」

「このレベルの代わりとなるとすぐには用意できないよ。しばらくは柵の上のを使ってきたな」

オビトは柵の上に相手ある箱を手に取り、開ける。中には幅広な忍刀が入っていた。しかし、刀というよりも形としては剣に近い。

「あんがと。ありがたくもらつとくわ」

「あげた覚えはないよ。そんなことより、いい加減チャクラ刀にかえな。ぽきぽき人の商品壊しよつてからに」

チャクラ刀ははつきりいって高い。手裏剣サイズならともかく刀を作るなら三百万

両は行くだろう。オビトにはそんな金を捻出する宛は全くないのだ。「うーん。まあ、しばらくしたら考えるわ。とりま、よろしくね」

オビトは支払いだけ済ませ、さっさと帰宅した。

世の中の大半は予定通りにいくとは限らない。がそれが悪い方向に転ぶとは限らない

オビトは戦慄していた。てつきり単独任務だとばかり思っていたからだ。まさか。まさかまさか。この二人と任務に出ることになるとは

「ダンゾウ様。あれが最後の一人のうちはオビトです。久しぶりね、オビト」

「こいつがうちは唯一（・・・）の万華鏡の使い手か、大蛇丸」

やべえ。俺、死ぬかも。オビトは素直にそう思ってしまった。だって不吉すぎる。忍の闇と呼ばれた最恐の男＋アーーーーって意味で最叫の男（おかま）と出るなんて聞いていない。

オビトの内心も察せず、ダンゾウと大蛇丸はこちらへと近づいてくる。

「カガミの写輪眼にはよく助けられた。オビト、お前にも期待しているぞ」

「は。ところでおかま・・・大蛇丸様。雨隠れには自来也の弟子がいるそうですが」

オビトの言葉に反応したのは大蛇丸ではなく、ダンゾウだった。

「自来也の？では、予言の子の可能性があるな」

「はい。ミナト先生がいるとはいえ、雨隠れのその弟子。輪廻眼とかか」

カツとダンゾウと大蛇丸は目を見開いた。

「世界三大瞳術の中でも最も崇高されるあの眼が」

「ククク、興味深いですね」

「寄り道ついでに少し見て帰りませんか」

ダンゾウはうむ、と頷くといった。

「親書を届けた後によるとしよう」

三人はゆっくりと雨隠れへと歩を進めた。

道中、他愛もないことを話しながら歩き、オビトは大蛇丸から情報を探っていた。

龍池銅の話から、仙術の話など。様々なことを聞いた感覚だと、まだ、人体実験には手を伸ばしていないようだ。まあ、次の火影に自分を推薦するためにも少しでも後暗いところはなくしておきたいのだろう。

ダンゾウは右目こそ包帯で覆っているが五体満足で、また、柱間細胞には手こずっている様だ。これならうまい具合に交渉できるかもしれないと、オビトは内心で喜んだ。

ある程度の目星は付けてあるとは言え、未だマダラの本拠地は見つかっていない。可

能であるならば暗部を使いたいと考えていた。マダラから取れる利益が里のためになる可能性は高い。ダンゾウも協力を惜しまないだろう。

地図と進行スピードから考えてオビトは影分身をした。分身を走らせて、先に町で宿を予約する算段だ。こういう時下つ端は気を遣う。多分、ダンゾウも大蛇丸も野宿でもそんなに文句は出ないだろうけど。

「ダンゾウ様。魚と肉と精進、どれがいいですか」

「魚だ」

「私は肉よ」

「了解です」

分身は猛ダツシユでかけていった。流星はオビトの分身、オビトの思いを如実に現した速度だ。つまり、猛烈に逃げたい。

「オビト。私が教えた術は使えこなしているみたいね」

そういったのは大蛇丸だ。オビトは一時の間、大蛇丸の元で禁術を学んでいた。流星にミナトや自来也に禁術を教えてくれとは言えなかったのだ。

代わりにうちはが作った術や写輪眼を使用した術を知っている範囲ではあるが教えることになったが。

それから、オビトたちは川の国で一晩の宿をとり、明朝、雨隠れの里へと向かった。

全くもって余談だが、オビトは何時でも二人に対応できるように薄い眠りにしか入らなかった。

「久方ぶりだな。ダンゾウ殿、大蛇丸殿」

マスクをした忍が話しかけてきた。

一応、位置取り的には俺がメインなはずなのだが、やはり、実際の里での偉さは無視できないようだ。

「半蔵殿。こちらが火影様からの親書にございます」

よってきた半蔵の腹心に親書を渡した。親書が半蔵の手に渡り、半蔵はじっくりと読み進んだ。

「相分かった。火影様には確かに了解しましたとお伝えください」  
「はー！」

オビトは短く返事をした。中身が気になったが、態々自分が知る必要がないのだろう。最も、推測はついている。おそらく、岩隠れとの和平交渉の提供と仲介だろう。オビトはダンゾウと大蛇丸を連れ、謁見の場を離れた。これ以上ここにいる理由はない。これが国同士の外交であれば祝いの場でも儲けるのだろうが、忍同士においてはそ

のようなものはない。

「自来也の弟子の場所はわかかっておるのか」

「はい。既に調べが付いております」

オビトは二人を先導するように移動していく。しばらく進むと、コンクリートのできた建物についた。

「何者だ！」

建物の入口にいた忍が誰何を問う。

「木の葉の忍だ。長門、弥彦、小南さんの何れか、或いは全員とお会いしたい」

「何の様だ」

「ただの謁見だ。先ほど、半蔵殿ともお会いしてきた。その件も含めてお話がしたい」

「分かった。少々お待ちいただきたい」

二人いた忍の一人が中へ駆け込んでいった。

しばらく待っていると中へと入り、特になにも飾り気もない広間に通された。

広間には三人の忍と周りを囲むように多くの忍がいた。

「初めまして。俺が暁のリーダーの弥彦だ。こっちが小南と長門」

挨拶をした弥彦に対応したのはダンゾウだ。



「初めまして。儂は木の葉のダンゾウ。こっちはオビトと大蛇丸だ」

ダンゾウが名乗ったあたりで辺りに動揺が走る。それほどまでに彼の悪名は各国に届きわたっていた。

「忍の闇が態々俺たちになんのようだ」

「何。輪廻眼がいるというのでな。少し見に来ただけだ」

ダンゾウの目線はじろりと長門へと向いた。

「創造神とも破壊神とも呼ばれるが。長門とやら、お前はその目で何を望む」

「俺は、弥彦の理念に共感している。争いではなく、話し合いをもってこの里を、世界を、平和にしたいと思っている。それが、俺たち曉の理念だ」

「……どうやら、時間を無駄にしたようだ。長門とやら、一つ言っておこう。そのようなことは不可能だ。これまでの歴史がそれを証明している」

ダンゾウはそれだけを言うと、帰ろうと歩いていく。

「あ、俺、もう少し世間話していくんで先に宿に戻つててください」

「いや、宿は必要ない。儂はこのまま岩隠れに行く。大蛇丸、ついてこい」

なるほど、オビトについてきたのはついでのようだ。おそらく、オオノキに和平の親書を送るのが本命だろう。しかし、火影様も博打好きだな。和平反対派筆頭のダンゾウを親書を託すなんて。

ダンゾウが出て行くのを見送っていると弥彦が声をかけてきた。

「それで、何の用なんだ」

「冷たいっすね。一応、兄弟弟子みたいなもんなのに」

三人共がくいつと首を傾げ、ハツとする。

「お前、自来也先生の弟子なのか!？」

オビトはぐつと自分を指差し、

「弟子の弟子っす。一応、本人から火遁の術習ったりしたけど」

「そーか、そーか。自来也先生は元氣か？」

「バリバリ。今は木の葉にいるよ。まあ、機会があればまた会えるんじや……!」

ダンゾウと交渉（……）していた影分身が消えた。

「そうなるわけね。これも六道仙人のお導きってわけかい、ええ？」

思わず、独り言をつぶやいてしまうほどの結果と情報だった。

「どうしたんですか？」

只事ではなさそうな雰囲気を感じ取ったのか、小南がこちらを気にかけてきた。

「いや、なんでもない。すまんが、もう帰るわ」

「帰っちゃうのか？」

自来也の話をもう少し聞きたいのか長門がそう言った。オビトはすまん。とだけ

謝り、最後にとを続けた。

「もしかしたら、だが、近いうちに半蔵殿を仲裁とする岩隠れと木ノ葉隠れの和平がこの国で行われるかもしれない。折角だから参加してみたらどうだ？理想へと大きな一歩になると思うぞ」

「本当か!？」

「あるかも、な。確定じゃないが」

暁の面々はそれぞれ顔を見合わせている。それを見てからオビトはその場を離れた。

「なんの用だ」

ダンゾウは後ろを振り向きもせずそう訪ねた。大蛇丸は首だけだが、後ろにたったオビトに向けている。

「少し、交渉に。影分身で恐縮ですが。その前に」

そう言つてオビトは大蛇丸に視線を向けた。

「下がっている」

ダンゾウは言葉だけで何が言いたいのか理解したらしく、大蛇丸を下がらせる。大蛇丸としても内容は聞きたいところではあったが、自らを火影に推すように手回してあるダンゾウに逆らうつもりはないらしく、おとなしく下がった。

「それで」

「暗部を貸していただきたく。なるべく、口が固く、地中の探知能力や仙術探知ができるものがいいです」

「根のものは全て、呪印で縛ってある。しかし、その条件にあてはまるのは僅かだな。それで、何を出す」

「木遁忍術の祖、千手柱間の細胞です。これを大蛇丸に提供すれば、木遁を使えるようになるのも、大きく近づくでしょう」

そこでようやく、ダンゾウはこちらを向いた。

「足らん。お前の不必要になったその目も差し出せ」

「……………これについても色々ご存知のようで」

「根を舐めるな。それに儂自身、うちはマダラの話はよく知っておる」

「しかし、不要になるのは何時かはわかりませんよ」

「否、すぐにでも不必要にできる」

「と、言われると」

ダンゾウの言い方ではまるで既に万華鏡写輪眼の使い手が他にいるようではないか。シスイは誕生こそしているがまだ八歳だ。万華鏡写輪眼が開眼しているとは思えない。「その様子では知らんようだな。……木の葉にはもうひとりその目が開眼した者がおる。もはや、忍びではないがな」

そこまで言われてオビトはようやくその可能性に至った。

目の前で夫を失い、息子が親殺しの大罪を犯したのだ、優しい彼女が絶望に打ちひしがれたとしても何ら不思議ではない。

「分かったか。幻術マスターの異名を持ち、木の葉創設以来の陰遁使い。お前の母、うちは未菜だ」

「あの時、お前が自らの父に止めを指す時、その場には儂もいた。その時、確かに見た。未菜の写輪眼が変質していくのをな」

オビトは少し、考えるとすぐに答えを出した。

「いいでしょう。母には父の写輪眼を移植します。これも木の葉のため、息子のためとあらば、抗いはしないでしょ」

「いいだろう。こちららも暗部の手配はしておく。任務が終わり次第、根の本部へと赴け」  
オビトは影分身を解いた。

これで、準備は整った。

34 世の中の大半は予定通りにいくとは限らない。がそれが悪い方向に転ぶとは限らな

さあ、  
亡霊狩りの始まりだ。

## 同盟を組んだ後すぐ裏切るのは定石

オビトは暗部4人をつれて、里を出ていた。火影たちには俺はダンゾウの遣いで外に出ていることになっていいる手筈だ。暗部二人は両方仙術の使い手だった。残りの二人は探知の護衛。

「じゃ、探しますか」

無線の届く範囲で左右に暗部を引き離す。オビトを中心にギリギリまでだ。本当はカカシの忍犬を使いたかったのだが、犬貸して、と言ったらうちはペットを飼っていないと言われてしまったのだ。

探すのは、神無毘橋のある草の国。ではなく、火の国の反対側、つまり火の国の中央から波の国である。おそらくではあるがこっち側、特に火の国にあるというのがオビトの考えだった。

定期的に休憩を挟みながら、探してまわる。しばらくして仙術エネルギーを集めるために、少し長めの休憩をとっていると無線から何か聞こえる。

「鼻歌？暗部が任務中に？・・・暗号か？」

オビトは一先ず記憶しようと無線に耳を近づける。そして、少し聞いて音の意味が分

かった。分からざるえなかった。

(あ、……これ幻術だ)

そう気づいた瞬間にはオビトは幻術空間にいた。

しかし、僅か0.5秒で幻術は解かれ、背後より襲いかかってきた仙術使い二名の攻撃は神威によって躲された。しかし、オビトと二人を遮断する様に大量の蟲が現れる。

なるほど。とオビトは感心する。仙術の使い手なら目を頼らなくても戦える。写輪眼対策に視界を塞ぎ、より一層大きくなった音の幻術で気を逸らしつつ、仙術使いの近接で仕留める。神威対策のできた戦いだことだ。

「……流石は忍の聞つてか」

舌の根も乾かぬうちに裏切るとは。あの契約はただの油断を誘うための策でしかないわけだ。

さて、どいつから始末するべきか。と考えを巡らす。姿の見えない蟲使いと同じく見えない幻術使い。目の前にいる仙術使い二名。

答え、全員。



オビトは一瞬で大量の印を組む。オビトの両手の間に人の頭部より2回りも大きい青白い炎が生まれる。それを上に飛ばし、さらに印を組む。すると炎は一気に広がり、膨大な数の槍となって降り注いだ。

火遁・蒼炎火蜂筵　二ノ段

仙術使いの一人は頭に刺さって、そのまま身体を貫通し死んだ。音もやんだ。負傷したか死んだかだからだろう。蟲は健在だ。負傷しても耐えたか何らかの術で防いだか、どちらにせよ位置は割れた。この術は接触タイプの探知術でもある。

消費チャクラは少なくないがやはり便利だ。オビトは生き残った仙術使いを無視して蟲使いへと向かう。瞬身の術で一瞬にして付くと蟲使いは出していた蟲を全て自身へと集めた。

戦術的には正しいだろう。しかし、この場においては間違いと言わざる終えない。オビトはチャクラを集中させた右手でぼんつと地面を触る。

結界忍術・うちは火炎陣

結界で蟲使いを閉じ込めて無力化する。蟲程度ではこの結界は破れない。あとは仙術使いだけだ。

クナイを取り出し、斬りかかる。それへのカウンターの一撃を更に写輪眼で合わせ、手首を貫きにかかる。しかし、クナイは手首を浅く傷つけるに留まった。

仙術使いは印を組み、ポポポツつと丸い毛玉を吐き出す。オビトはそれを見て神威ですり抜けモードに入る。毛玉は破裂し、火遁の針となってオビトに襲いかかる。

当然、オビトには当たらずすり抜けるが、更にニヤク、と猫の鳴き声が聞こえた。視界を始め全ての感覚が狂い曲がる。すり抜け状態のまま印を組むが幻術は解けない。

舌打ちをしてもう一度解こうとするが、やはり解けない。止むを得ず右手で左手の首を肘まで撫で、自らに触覚による呪印の幻術を掛け、視界を調整する。普段は使う機会がまるでない代物だが、解けない類の術を調整するとき役に立つ。

更に両腕で後三つほど呪印があるのだが、それは割愛しよう。

触覚が歪んだままなので、クナイに指を入れしつかりと握り込む。視覚のみに頼っての戦闘はあまり好きではないのだがやむを得ない。オビトは距離を詰め肉弾戦に移行する。仙術での体術は確かに強いがそれでも写輪眼が劣るわけではない。

肉体の頑丈さも計算に入れ、首、眼、関節を狙い、隙あらば写輪眼で仕留める。

相手の両手を払い、首に掌底を叩き込む。ひるんだ所へ脛へとクナイを刺し込み、ぐつと力を入れる。クナイは脛を貫き、眼球へと達する。

悲鳴を上げようと開いた口に、神威で時空間から槍を飛ばし、口内から首裏にまで貫通し、仙術使いは絶命した。

「あゝ、手ごわい」

オビトはそう言うのと刺客について考えた。

一言で言ってしまうれば少ない。いっちゃん悪いが神威を持つている以上、三忍より強い。というか死ににくい。神威がなくても俺が三人いれば互角以上に渡り合えるだろう。護衛の名目なら不自然じゃない範囲であと四人は追加できるはずだ。ということ、俺以上に優先させたい事があるということ。

オビトは右手の裾をめくった。そこには同じ呪印が五つ並んでいる。これは影分身から本体へと報告用。二進数方式で右か左かでその異常を示している。

三つ目の呪印が右に移動していた。ということは

(・・・・・・輪廻眼か)

オビトは影分身を二体作りだし、一体を結界の維持に、もう一体を木の葉へと飛ばした。そして、オビト自身は長距離を移動すべく時空間へと飛んだ。

## 口寄せ生物は常識の範囲内で

長門たち暁がいる場所、否、その戦場を眺められる場所についたオビトが見たのは、暁とそれを囲む暗部。そして、その間にうちは火炎陣を張るオビトの影分身だった。

戦場を見渡し、的を数える。戦いになる前に殺しておきたい奴を探す。白い髪の男、山中一族かもしれない。殺しておこう。瓢箪を持った忍がいる、油女一族か。写輪眼を遮られては困る。殺しておこう。黒髪の・・・あれ？シカクさんじゃね？この人殺したらダメだろう。覚えておこう。で、それがダンゾウだ？殺したらまずいんだが。まあ、三人以上はほぼ殺せないからこれでイイだろう。

オビトはクナイを二本取り出し、片方を右手に乗せて（・・・）右目の前に置く。左目で油女一族に標準を合わせ、両目で神威は発動させた。クナイは時空間に取り込まれ、油女一族の首元から飛び出し、その首を貫いた。

更に素早くもう一本取り出し、山中一族の首を貫く。オビトはその後すぐ敵陣のど真ん中に飛び込んだ。

「さて、暗部諸君。言い訳があるなら聞こうか」

暗部諸君とは言ったものの実際にはダンゾウへと向けられた言葉だった。無論、これ

は輪廻眼を狙ったことではなく、オビトの写輪眼を狙ったことへの言葉である。

くい、と暗部の一人が手首を曲げた。答えるつもりはないということなのだろう。

暗部が各々構えた。

「なら死ね」

穏便にすまそうとしていたのだが、話も聞かないというのであれば手加減するつもりはない。こちらでも手練の暗部衆相手に加減する余裕など本当はないのだ。

速攻とも呼べる影が俺を物理的に縫い留めに来るが、オビトはそれをサイドステップで躲す。影縫いならばいくらでも神威ですり抜けられるのだが、影縛りの術はそうは行かない。山中一族の心転身の術もだ。木の葉の秘伝忍術は神威との相性が悪いものが多い。

横へと避けたオビトに何倍も倍加した秋山一族と思わしき人物の手が叩き込まれるが、オビトは神威ですり抜け飛び出す。しかし、待つてました言わんばかりに心転身の構えをする暗部がいる。

なるほど、とオビトは毒づく。ダンゾウは輪廻眼だけでなく、うずまき一族の身体も欲していたのか。心転身で身体を奪うというのは神威だけでなく、輪廻眼にも有効だ。

オビトは上着を脱ぎ、それを盾にした。心転身のネックは射程の短さと、このように相手と自分との間に何かあると術が失敗する成功率の低さだ。

オビトはそのまま山中一族を飛び越え着地し、反転。山中一族をクナイに火遁を纏わせて始末しようとするが、横から忍刀を持った暗部が二人、オビトを串刺しにする。

オビトはそれを神威ですり抜けるが、目の前には心転身の術を構えた山中一族。元来の、つまり原作時のオビトであれば、これで詰みと言えるが、今のオビトは両目を持っている。

神威ですり抜けて維持したまま、オビトは左目の神威で、山中一族の胴体を腕ごと飛ばした。

残されたのは頭と下半身だけだ。辺りに驚愕が走る。当然だ。オビトは神威をすり抜けたまま発動できることを誰にも、それこそ母親にも話していないのだから。

さらに身を伏せ、神威を解除して暗部二人をクナイで貫き、始末する。

眼だけで左手の甲を見る。針は既に15分は立っていた。左手の呪印は一言で言うてしまえば時計だ。腕時計もあるのだが、はつきりいって邪魔なので呪印で時計を作ったのだ。

後、数分程度のはずなのだが、とオビトは影と距離をとりつつ、常に移動しつつ、辺りを見渡す。数は減っていない。否、当然殺した分は減っている。

あと少し、雨隠れの忍、つまり暁の面々を守り抜けば目標は達せられる。

いきなり地面から飛び出してきた忍の腕を掴んでへし折り、蹴り飛ばして、仲間ごと

巻き込む、膨大な水遁を土龍壁で直撃を防ぐ。さらに巧みに視覚からよつてくる影から土龍壁を足場に飛んで逃れ、空中にいて、動けないのいいことに飛んできた真空玉を神威ですり抜け、着地点へとよつてきた影を影分身を足場に躲し、土遁で足場を崩してきたのでコケてしまい、止むを得ず、神威で地面に潜る。

はつきり言おう。チャクラが持たない。常に写輪眼で且つ、神威を連発していて、影分身も今日だけで100体位は出しているのだ。

割とせえぜえいいながら、シカクさんを土遁・心中斬首の術で生首状態にして、顎を蹴って、動けなくする。

チャクラ不足に写輪眼も解除される。これを機と見た暗部たちは襲いかかる。オビトは最後の術に口寄せを選択し、口寄せした。

ミナトを。大事なことなのでもう一度。ミナトを。

口寄せされたミナトは困惑したように周りを見渡し、オビトを見つけると頭を抱えた。

「オビト。僕を口寄せするのはできればよしてくれないかい。いや、ほんと。これからクシナと食事に行くところだったんだけど」

いきなり口寄せされたミナトに暗部も困惑する。他国里において見たら逃げろとまで教えられる忍がいきなり現れたら誰だってビビるもんだ。

ミナトの登場に困惑する暗部を囲むように大量の忍が姿を現した。

「間に合った〜〜！」

オビトは思わずそう叫んでいた。

忍の中心にいるのは火の笠を持つ忍。即ち、三代目火影だ。

「これはどういうことだ。ダンゾウよ」

暗部たちに話しかける火影をよそに、オビトは火影の元へと遣わせていたのと、暁を守る結界を張っていた影分身を解き、情報を統括した。影分身の疲労感も合わさり、オビトはどきりと倒れ込んだ。無論。まだ、気絶はしていない。

「そうとう、激戦だったようだね。オビト」

「もうマジ死ぬ」

ミナトはにこりと微笑むと飛雷神の術でオビトを自分の家へと運んだ。

「取り敢えず、一休みするといいよ。クシナ何か作ってもらつとくから、起きたら食べる  
といいよ」



ミナトはそう言つて火影の元へと戻ろうとするが、オビトは最後の力を振り絞つてミナトを掴むとちよいちよいと指で寄せ、何かを呟くとそのまま眠つた。

ミナトは目を細めてこくりと頷くと、再び、火影の元へと戻つたのだつた。

忙しい時ほど悪いことが起こると言うが良いことも起こる

目覚めたオビトはおいてあつた食事を軽く平らげ、今はクシナが作った手料理をがついている。

体内のチャクラを、厳密には身体エネルギーを補給するためである。胃に入ったものがすぐに吸収されるわけではないが、人間は無意識の内にチャクラを生成する。オビトはそれすら尽きかけていたので食べても食べても入ってしまう。これは特に秋道一族が好んで使う技術だが、忍ならば誰でもできることである。

味噌汁を一口飲んでオビトはピタリと動きを止めた。

「これ、味付けがこの国風じゃありませんね」

それに野菜を切っていたクシナが嬉しそうに振り向いた。

「すごいね、わかるんだ。それは渦の国風よ」

「そういえばクシナさんは渦の国の出身でしたっけ。うまいっすね」

よかつた、と微笑み調理へと戻った。

「じゃ、そろそろ話そうか。食べたままでいいから聞いてくれ」

「うす」

結果からいえばダンゾウは引退した。暁の面々はそのまま護衛付きで送り、この一件は不問にし、暁は木の葉に借りを作ったと言えるだろう。

ダンゾウの後任は大蛇丸になったらしい。そして、火影が引退し、ミナトが四代目火影になることとなった。

「色々ツッコミどころがあるんですが。大蛇丸を根のリーダーにするとか、正気ですか？」

「勿論。ついでにいうと引退した三代目が顧問として監督するから、あまり、心配しなくていいと思うよ」

オビトの脳裏には父親（ヒルゼン）に監視されながら必死に勉強する大蛇丸の姿が映った。

「かわいいそうに」

「なにが？」

思わず出てしまった呟きにミナトが触れるが、いえなんでも、とだけ返す。

「で、僕が次の火影になるわけだけど、それで早速、暗部を作ることにしたんだ」

「火影直轄暗部っすか」

「いや、違うよ」

あれ？とオビトは肉を落とした。オビトの中では、それで暗部に入ってくれないかい、と誘いを受けるのだろうかと思っていたのだ。ぶっちゃけ、飛雷神の術を習える機会なので護衛隊に入りたいから断ろうとは思っていたが。

「じゃ？どう言う意味で？」

「文字通り、第三の暗部組織を作るといふことさ。柱は二本よりも三本の方がいいからね」

「はあ。じゃあ、暗部長は自来也先生か、綱手様あたりですか」

「まず、とお茶を飲んでいたが、オビトは次のミナトの言葉に吹いた。

「いや、暗部長はオビト、君だよ」

ぼたぼたぼたとお茶がオビトの服を濡らす。

オビトにタオルを渡しながらミナトは続ける。

「実は三代目とダンゾウさんからの推薦でもあってね。僕としては護衛隊の方に入って欲しかったんだが。まあ、仕方ないさ」

「ええー・・・」

「二人とも口を揃えてこういったよ。オビトはカガミに似ているってね」

なんとも言えないが断る理由もなく、給料が上がるなら文句はない。ぶっちゃけ欲しいのだ。チャクラ刀が。命を預ける武器にはいいものを使いたいのだ。正直、鮫肌を使っている鬼鮫が信じられない。

「組織名とか、人員は？」

「自分で頑張ってね」

ニツコリと鬼畜。

マダラ搜索・・・はもういいと思うんだけど。取り敢えず、今日は休んで、明日は暗部集め。明後日にマダラを始末しに行こう。

頭で予定を立てて、ご馳走様をする。

「うまかったです、クシナさん。ミナト先生、組織名は帳でお願いします。それじゃあ俺は「カカシは火影直轄にされるから」

ミナトがオビトを遮り、さらに先回りする。

「え？」

「リンもライドウもゲンマもアスマも護衛小隊に入る事になっているし」

オビトは頬を引きつらせながら言った。

「嫌がらせつすか」

まさか。とハハハとミナトは笑った。

「参謀役に奈良家のシカクが入る事になってるから上手く協力して頑張つてね」  
泣きそうになりながら、はいとだけ答えてオビトはミナト家を出た。

オビトはこれ以上先回りされては堪らないとオビトはうちは当主、フガクの家へと来ていた。

「シスイとイタチをか」

「はい。まあ、いきなり危ない任務につかせたりはしらないですよ。青田買いです」

ふむ、とフガクは顎をさする。確かに二人の才覚ならばという気持ちもないわけではない。獅子は我が子を千尋の谷に突き落とすとも言おうし。

「いいだろう。二人には言っておく」

内心でガッツポーズ。

「それと、警邏隊から一人、上忍を行かせてやろう」

さらにガッツポーズ。

「組織を作るなら金はいくらあっても足りないだろう。こちらから少し出してやる」

オビトは勝鬨を上げた。

無論、フガクも思惑がないでもない。オビトがそれを感じるかどうかは別だが。

# 10年20年先の未来に政治家は評価される。

薄暗い地下にオビトは来ていた。こんなところを好むのは闇に生きる忍だけだ。

「ああ、いたいた。探しましたよ、大蛇丸さん」

目的の人物を見つけて声をかける。大蛇丸は荷物をまとめている。四代目の正式な就任と共に根の暗部長になることが決まっているのだから、まあ、そこそこには忙しいのだろう。

「オビト。私は今忙しいのよ。それになにより機嫌が悪いの。悪いことは言わないから帰りなさい」

オビトへと振り向いた大蛇丸は凄まじいとしか言い様のない顔をしていた。

まあ、ダンゾウの失脚で火影推薦もなくなり、普通に次の火影がミナトに決まったのだから機嫌がいいわけがないだろう。

「そうですか。機嫌が悪いんですか。仕方ないですね。マダラの死体についてだったんですが、いや、残念です」

「今、お茶でもいれるわ」

素晴らしい変わり身だった。



「で、そのマダラの死体はどこにあるのかしら？ 私も探してただけど、二代目が隠したところにはなかったのよ」

「ええ、俺も探すのは諦めました。ですので、こちらへと呼びましょう」

「呼ぶ？」

「ええ」

オビトは僅かに微笑むと、作戦を伝えた。強制的で、決して逃がさない様な方法を実行するために必要な駒を揃える段取りも含めて。

大蛇丸は岩隠れへと飛び、オビトは影分身をミナトのところへと送り、本体はイタチとシスイの修行を見ていた。

「っ、強い……」

空気に溶けてしまいそうなほど小さい声だったが、シスイが呟く。イタチとシスイ、二人共が大量の汗をかいて、仰向けに倒れていた。

しかし、それ以上に異常なことはオビトが汗をかいていることだろう。

オビトは既にも上忍であり、実力的には木の葉の三忍に次ぐと言っても過言ではない。否、綱手に関しては既にも上回っているとも言えるだろう。

にも関わらず。オビトが汗をかいていた。冷や汗と言う名の汗を。

僅か6歳と8歳でこれである。シスイに関しては既に写輪眼を開眼しており、体術に關してはリンよりも実力は上だろう。

そして、更に恐ろしいのがイタチだ。既に火遁の術を使いこなし、卓越した手裏劍術に後衛での支援は厄介の一言に尽きる。

ば、馬鹿な。チャクラが足りないはず。とかガン無視で豪火球を撃ってきた。もしかしてフガクさん、暗部入りということでイタチに教えたのだろうか。

順当に行けば次の火影はイタチかと思っていたが、シスイという手も十二分にありだろう。

最も、ミナトの引退は大体二十年後くらいになるだろうが。

予定にはなかったが、作戦に組み込むか？幸い、暁は無用な殺生はしないし、失敗しても笑い話で済ませられるか。

「お前ら、水面歩行の業は終わっているか？」

「はい」

タオルで汗を拭きながらシスイが答え、イタチが頷く。

「今度、暗部で任務があるんだが、そこまで秘匿性もないし、危険性もない。やる気があ  
るなら入れてやるが、やるか」

「はいー」

「宜しくお願いします」

前者がシスイ、後者がイタチである。しかし、イタチはこの年にして落ち着きすぎで  
ある。まあ、既に戦場を経験しているからだろうが。

「よしーなら、続けるぞ。次の任務では高い体術が必要になるからな」

シスイとイタチは日が沈むまで鍛えられ、日が落ちてからは先を潰したクナイでの中  
距離く遠距離を徹底的に鍛えられた。

「ん。いいよ。あとで書いとくから」

影分身は拍子抜けのように肩を落とすとすぐに姿を消した。

「暁・・・ね」

ミナトは小さく呟く。ミナト自身、暁については知っていたし、自来也からも長門たちについては聞かされていた。兄妹弟子にあつてみたいと言う気持ちと、尊敬する師の弟子ならば、その人格にそこまで問題ないだろうと、岩隠れとの和平交渉の場における仲立りの護衛戦力としての暁の参加を許可したので。

ミナトが思いふけていると入りますという声と共にカカシが執務室に入ってきた。正式な火影就任までは、直属の暗部を作れないという、まあ、形式だけのルールを守り、カカシはそれまでの間は護衛小隊の方へと入っていた。

「カカシ、ナイスタイミング。岩隠れとの和平交渉なんだけど、護衛は二人までなんだ。一緒に来てくれないかな。君とアスマに頼もうと思ってるんだけど」

「はい、わかりました。アスマには俺から伝えておきますね」  
「ありがとう」

今日の晩御飯は何かなくと考えながらミナトは執務へと戻った。

オビトは葛藤していた。なぜなら、シスイとイタチをそれぞれの家へと送ったとき、フガクより、帳を作る資金の援助金を預かったからだ。

要は、これだけあればチャクラ刀が作れるね！ということである。この金は里からの正式な資金ではないし、オビトが個人的に使い込んでも、まあ、フガクに呆れられる程度だ。それにオビト個人的には大金でも組織や一族からみれば端金だし。

結局、資金はシカクさんに預けることとなった。シカクに渡す時のオビトの手は震えていたと言う。

右手は嘘、左手は真実。拍手をするとどちらの音になる？

オビトたちは雨隠れの里、暁のアジトのそばに潜んでいた。

フォーマンセルはオビト、イタチ、シスイ、大蛇丸で構成されバディは大蛇丸とオビト、イタチとシスイで動くこととなるだろう。さらにオビトは5人ほどの影分身を産み出し、イタチとシスイの援護をすることとなる。

オビトたちの服装は暗部の者でもなく、かと知って木の葉支給のベストをつけているわけでもない。帳の統一服としてオビトが選んだのは、原作におけるトビの暁加入前の忍装である。そしてそれに、黒塗りの暗部の仮面をつけ、顔を隠している。

「にしてもイタチ。お前、ちびくて似合わないな。ま、シスイもだけど」  
「そういうオビトさんは妙に似合ってますね」

「たりめーだろ。俺に似合う様にデザインしてんだから。一番似合っていないのは大蛇丸さんだけだな、ククク」

この忍装に關しては大蛇丸は似合っているとかないとかというレベルではない。明らかに着られている。そして、オビト自身知らないことではあるが、忍装を作ったの

はうちは御用達であり、フガクにより手が加えられており、うちは一族に似合う仕様にされているのである。

「んじゃ、作戦開始ね。次の秒針が0になったら実行で」

そう言うと、オビトは影分身を残し、大蛇丸をつれ、時空間へと消えた。残されたイタチとシスイも初撃の爆撃の準備をする。

起爆札のついたクナイを取り出し、時計を確認する。秒針がゼロになると、クナイを拠点の壁へとさし、爆破する。

爆音に気が惹かれた入口の二名を気絶させ、イタチとシスイは拠点へと入る。そして、オビトの影分身たちは窓、というべきかどちらかといえど吹き抜けから飛び出してきた忍の相手をする。

突如の爆音と振動が長門たちを襲う。談笑をしていた長門たちは音の方へと顔を向けるが、それに対してオビトは音とは反対側に姿を現した。爆発を起こさせたのは全てのこの一瞬のため。長門、弥彦、小南の三人を時空間へと攫い、自らもまた時空間へと戻る。

時空間では大蛇丸が桶を用意して待つており、長門たちは大蛇丸とオビトの間に挟まれている。

「なんだ！ お前たちは」

オビトも大蛇丸も仮面をしていて、その正体には気がついていない様だ。隠す必要性もなく、オビトは仮面をとった。

「や！御三方」

「オビト……」

つぶやいた小南を庇うように長門がオビトへと一步踏み出す。弥彦は大蛇丸をかなり警戒している様だ。まあ、なんだかんだで不吉なイメージがつきまとうからな。あの人は

「いや、すいませんね。こんなところに招いちゃいまして。まあ、一応火影様からの書状もあるし。まあ、他にも色々」

「じゃあ、それを渡してくれるのかい？」

長門は知り合いいえ、オビトに対する警戒心が解けきれていないようだ。最も、忍である以上、他里の忍に対しては知り合いいえと警戒をするのは当然のことであるので、あまり気にならないが。



オビトは書状を取り出すと、クイツと手首のスナップで長門へと飛ばす。長門はそれを受け取ると中身を検める。

「これは……」

「長門、何が書いてるの?」

「岩隠れとの和平の交渉を川の国で行うからその場の護衛を頼むといった内容だ。それも半蔵殿と連名で。そして……」

小南は目を見開き、書状を覗き込む。確かにそこには波風ミナトと半蔵の名が並んでいた。その横には両天秤のオオノキ、即ち土影の名があった。これは暁にとって大きなチャンスだ。この和平がなり立てば、暁の名は一気に売れるだろう。

だが、これがタダなわけではない。もし、そうであるならばオビトは自分達をこんなところに招いたりしなかっただろうと長門は興奮を抑えながらも思った

「何が望みなんだ。オビト」

弥彦は大蛇丸を警戒しながら、オビトの方を向きもせず問う。大蛇丸は未だ面をしているからその正体はバレていないはずなのだが、弥彦の危険人物に対する察知能力は流石と言わざる終えない。

「いえ、ちよつと口寄せをしてほしいだけです。長門にね。まあ、ぶつちやけ輪廻眼が手にはいればそんなことをする必要もないんですが、お互い不必要な犠牲は出したくない

でしよう？だから、平和的に口寄せをお願いしてるんです」

「口寄せ？あのかい奴をか？あんなのを使って何をやる気だ」

なるほど、外道魔像を呼び出したことはあるようだ。オビトにとつてはここで本当の目的をペラペラ喋ってしまってもそこまで問題ではないのだが、ここは虚実入り混ぜて説得する方向に持つていく方が後腐れがないだろう。

「部外秘でお願いしますが、実はあのかい奴は外道魔像といって初代火影、千手柱間によつて作られたもので初代火影は木遁忍術の使い手だったのは知っているとありますが木遁には尾獣の力を抑える能力があつて、初代は未来の木の葉のために外道魔像を作つたのでしようが、不手際があつて行方不明になつていたのです。それで調べていたら輪廻眼であれば口寄せできることがわかつて、まあ、近い内に九尾の人柱力が出産することになつていゝるんですが、それで出産の際に封印が弱まるので外道魔像の力を使ってその間九尾の力を押さえつけようということになりました、俺がその回収の任を受けまして、まあ、外道魔像を木の葉へと返却してもらつたために態々、岩隠れや雨隠れを飛び回つて、暁に役立ちそうな物を手に入れ、交渉にきたというわけです」

相手に口を挟ませないように真実に嘘をいれて話す。一体どれくらい理解したかは分からないが、出産のあたりに力を入れて話したので、まあ、平和のために使いたいという事は伝わつただろう。

「要は、外道魔像は九尾の力を抑える事ができて、出産のために欲しいって解釈でいいのかしら」

上手く誤魔化せたようだ。勿論です。と頷く。小南はそれで納得したようで、いいんじゃない？と長門に語りかけていた。弥彦は話についてくるのがやつとのようで、首を捻りながら頭で整理しているようだ。長門は付いてこれていない。

「ええと、じゃあ、口寄せすればいいのかな」

「はい、この時空間は本来口寄せはできないんだが、そこは俺が神威で現実と繋げておくので遠慮なく口寄せしてくれ」

じゃあ、と長門は口寄せを発動した。煙と共に外道魔像がその巨大な身体を現した。「じゃあ、ご苦労さん」

オビトは三人に触れて、時空間から追い出す。そして、外道魔像に向き、こういった。

「もう、隠れてなくていいぞ。うちはマダラ」

## 忍の世界で一番高く売れるのはなんだかんで死体

大蛇丸はつけていた面を外した。もう必要もない。死人に口なし、大蛇丸もオビトもここでマダラを始末することを決定していた。

勿論、ただ殺せばいいという問題ではない。だからこそその桶。オビトと大蛇丸は同時に印を組む。

封印術・魔手魂鎖縛象

桶から大量の白い手が未だ姿を現さないマダラへと襲いかかる。

「捕まえた………けど、こりゃ無理か？」

手応えを感じながらも精神体の綱引きに手応えを感じず、というか普通に引つ張れず大蛇丸に確認する。

「ダメね。やはり術自体の力が弱いわ。それに相手は伝説の忍、こういうのは力よりも技が肝心だからね、技量でも勝てそうにもないわね」

「ちえ、しゃあねえ。取り敢えず殺してから考えるか」

のっそり、のっそりと大きな鎌を杖にマダラがようやくやく姿を現した。

「なんだ。お前たちは」

「なんだはねえぞ、なんだは。あんたの子孫だよ」

目を写輪眼にして語りかけるが、マダラの眼はオビトよりも大蛇丸に向いているように思う。

「その目はこの世が地獄だと知るものの目だ。儂に協力すれば、せk「ラーっ！」」  
オビトが手裏剣を投げ、大蛇丸は口から剣を飛ばした。老いたマダラにそれを防ぐ力はなく、腕に剣が刺さり、身体中に手裏剣が刺さる。

「ひ、との話くらいk

### 風遁・鎌鼬の術

大蛇丸の放った無数の斬撃がマダラを襲う。今回、オビトはあまり主体となつて戦うことができない。神威の空間では神威は使えず、オビトの実力は平均的な上忍程度のものだ。また、大蛇丸に死体を引き渡すので火遁で焼いてしまうのも問題だ。更に神威の空間では土遁の術はほとんど使えない。

マダラは自らの生命線である綱に当たるのを鎌で防ぎつつ、足で踏ん張りを効かせ、吹き飛ばされないよう堪える。

しかし、大蛇丸も手加減がすぎる。明らかに術に威力がなく、死体の裂傷を恐れているのがわかってしまう。

「悪いがこれ以上時間をかけるようなら俺が火遁で焼き殺すが……」

オビトの言葉を聞いて、仕方ないわね、と呟くと大蛇丸は刀を取り出し、マダラへと迫った。マダラも諦めずに鎌を一閃するが大蛇丸はするりと避けて、生命線である綱を切り裂き、マダラをオビトの方へと蹴り飛ばした。

「よしー」

オビトは再び封印術・魔手魂鎖縛象を発動させた。もはや死に体というよりほぼ死んでいるマダラを桶へと封じた。

この術は魂の封印、屍鬼封尽がベースとなっておりリスクの軽減を極めることでノーリスクで発動させることができるようになったもののだが、その反動として、術自体の力が弱い。

だが、これで穢土転生による復活は不可能となった。

オビトは更に四枚の札を出して、桶に封印を仕掛けた。あとは持ち帰ってクシナに更の上から封印を重ねてもらえばいいだけだ。

オビトは更に死体から写輪眼を剥ぎ取った。

「じゃあ、死体はもらうわね」

大蛇丸が舌なめずりしながら聞いてくるので、お好きにとだけ答えて、外道魔像の方へと歩いていく。巻物と取り出し、魔像へとくっつける。

左目の神威で大蛇丸とマダラの死体を木の葉へと追い出し、神威で現実と繋げた状態で滅を行い、魔像を元の場所へと戻す。

オビトもすぐに現実へと戻り、しばらく休憩していると口寄せにより、魔像の元へと飛ぶことになった。オビトが魔像に貼り付けた巻物は時間差で口寄せを行う様に仕組んだ物で魔像の完全回収とゼツの回収、それにマダラの遺品の回収のために、態々用意したものだ。

な、なんだお前は！とか言ってるゼツを無双張りに仕留めまくって死体？を回収する。これはあとで大蛇丸に高く売りつけてやろう。とかあくどいことを考えながら。マダラの死体にも柱間細胞はあるのだが、実験に使うには量が必要だろう。大蛇丸なら培養くらいできるかもしれないが単純に手間が減るので金で買ってくれるだろう。この際、チャクラ刀が買えるくらいには儲けさせてもらおうとする。

ゼツを処分した後は、通路にある武器を回収する。特に団扇はフガクさんに売れるだろう。良くも悪くも貴重品だし。

まるで追い剥ぎだなと自嘲しながらも、最後に外道魔像を回収する。大きさがあるので少し時間が掛かったと言わざるを得ないが、無事時空間にしまうことできた。

これでは帰るだけだ。……あ、イタチとシスイ忘れてた。

暁の拠点に行くと、イタチとシスイは捕まっていた。

拍手をするとメンバーと二人の視線が集まり、長門たちは納得したように嘆息した。

「お前の仲間だったのか……」

「まあ、そういうことつす。一応、護衛の実力があるかの確認と、あとはこいつらに経験を積ませるために。ちなみにどなたが捕まえましたか？」

オビトの問いに手を上げたのは五人、長門、弥彦、小南、に他オビトの知らない顔を二つ。

「どうだった二人共」

「イタチより先に捕まるとは、兄貴分として恥ずかしい限りです。ていうか輪廻眼強すぎでしょう」

「強かったです。今回の件で自身の短所が見えた気がしました」

ならよし！とオビトは二人を縛るロープを斬った後、長門たちに挨拶をしてから木の葉へと帰還……せずに湯の国へと身体を癒しに向かった。無論、時間に猶予があるわ



けでもないのので神威を使って向かうことになったが。

## なんだかんだで他人任せ

「いい湯だな」

オビト、イタチ、シスイは三人で風呂に入っていた。湯の国に来てすぐに宿を取り、温泉に浸かることにしたのだ。

身体を洗い、しばらく浸かっていると温泉の端に網を見つけた。

「おい、シスイ、イタチ。温泉卵あるぞ」

温泉卵に舌鼓を売っていると身体を洗うところに、見慣れたというか見慣れない背中が見えた。あれほど特徴的な背中をしている忍はオビトの知る限り一人しかいないが、特に今関わる必要性もないためあえて無視した。

シスイが温泉が飲めると書かれた看板を見つけ、イタチと共に飲んではしゃいでをしている（厳密にはシスイのみがはしゃいでいる）とガラガラと音がなり、見慣れた客が入ってきた。

「アスマじゃん」

「オビト、お前、こんなところで何してんだ？」

「こんなところなんだから身体癒しに来てるに決まってるだろ。そっちは任務か？」

「おう、駐在任務の最中だ。ちょうど交代だったんでな」

湯の国は火の国と雷の国の間にあり、今現在は木の葉が押しているが戦線がある。そのため、戦線維持をしている駐在担当がいる。

「つつても、明日には木の葉に帰るんだがな。なんか、他の任務があるとかで」

「へえ。そういえば紅とかは？」

「さあ？多分、女湯だと思うけど」

なるほど、と呟き、周囲を見渡す。堀の高さ、3mちよい。地面、岩づくり。温泉の敷地から少し出ると木が植えてあり土になる。逸そ変化の術で堂々と覗くか？堀から神威で顔だけです。或いは土遁で生首状態で覗く。ダメだな、情報が少なすぎる。

「シスイー！イタチ！模擬偵察訓練だ！」

温泉卵を食べていたイタチとシスイがきよとんとなる。

「これより女湯を覗く！女湯も覗けんように暗部の仕事が終わまると思うな！さんつ!!!?

飛んできた桶がオビトの頭部に直撃する。オビトはそのまま温泉に倒れ、ザバーンツと音を立てて沈黙する。

「その声オビトでしょ！性懲りもなく覗いて見なさい！簀巻きにしてサンドバッグにするわよ!!」

その様子を見ていたアスマはため息をつき、頭を抱える。

「大声出すから……」

オビトに当たり飛んでいった桶が温泉に浮いてきたオビトに、再び当たりカポーンと間拔けな音を響かせた。

「いやあ、なんかすいません。ご馳走になっちゃって」

温泉から上がったオビトたちはアスマたちの班の隊長に食事をご馳走になった。

「写輪眼で無理やり払わせたんだろうが」

もとい、無理やりおごらせていた。

「まあ、これも六道仙人のお導きってな」

「ちがう、絶対違う」

どうやら隊長さんは余程のダメージを受けているようだ。財布が文字通り、文字通り以上の意味で空になったのだからそれも当然だろうが。

それはそれとして影分身を作り出し、走らせる。これでこの国、というより里への用は済んだ。

「んじや、俺らは帰るけど、特になんかあるか？」

「ねーよ。さっさと帰れ。里だって忙しいんだから」

はいはいとだけ返すと、オビト達は木の葉へと向かった。無論というべきか神威は

使つてはいないが。忍びの足ならば里までは一日とかわからず、火の国にはすぐにでも入れるからだ。

木の葉についたオビトはイタチとシスイを返し、帳の本部へと赴く。

極秘資料を取り出し、中身を検める。この資料は言わば、帳の初期メンバー、つまり今現在帳入りが決定的に忍のプロフィールが書かれているものだ。

ぺらぺらぺらとプロフィールをめくっていく。中々にいい忍が揃ってきたが、暗部の育成機関であった根の人間もそこそこにはいるようだ。

しばらくめくっていると覚えのある名前を見つけた。

薬師ノノウ………「薬師」

原作において、重要な役目になっていったカブトの母親だっただろうか？ 今現在の状況のところには岩隠れへの長期潜入任務と書かれていた。任務が始まったのは今年である。カブトの方は根にいるのか………？

このあたりは今度、火影様に確認しよう。カブトとノノウに関係があるようなら、任務から回収するでしょう。岩隠れとの戦争は近いうちに終わるだろうし、和平がなつてからバレたら再戦のきつかけになつてしまふし、カブトが闇落ちする。

ノノウの資料を抜き取り、別の場所に保管する。場合によっては、カプト諸共、医療部隊で働いてもらうとしよう。

更にペラペラとめくる。シカクさんに集めてもらつたというのはなんだが、強い忍があまりいな。戦闘力という観点においては使えそうなのが俺と、うちはトドキ（フガク推薦の上忍）その他数名。シカクさん自体は個人での戦闘は強いとはいえない。暗部の仕事は通常任務と違い常にチームで動くわけではないので、個人の戦闘力は必須になる。シスイとイタチが一線級で戦えるようになるまで五年はみたい。

原作の時期からみても、本来ならば再不斬を誘いたい所ではあるのだが、原作と違い血霧の里になっていないためおそらく再不斬は抜け忍にはならない。

いっそのこと、サソリを誘ってみるか？ 四代目風影が就任しているところを見ると既に里を抜けているだろうし……。

任務中に見つけたら報告するようにさせればいいし、見つけたら誘うだけ誘ってみるか。多分ではあるが、風の国で忍里を潰して回ってるだろ。

あとは……と考えてそこそこの逸材がこの国には隠れている。というか別に隠れてはいないが、いることを思い出す。

そういえばそうだ。あそこがあった。

《火ノ寺》が

ちよつと用事がある時ほど緊急事態が入ってくる。

「うちはフガクが死んだ………?」

オビトの元へと届けられた訃報に、オビトは呆然と眩き、どすつと椅子に座り込んだ。フガクはオビトにとつてもそれなりに付き合ひのある人物であり、木の葉の上忍にして警邏隊のトップであるため、この里でもそこそこの重要人物である。

そして、それ以上にあるのがうちは一族をまとめ、抑えていると言う点である。もし、次の当主がクーデターを画策するような人物であるならば、暗部として動かねばならぬくなり、最悪の自体も想定されかねない。

「………フガクの死体はちゃんと回収されているだろうな。あれは木の葉の重役。死体から漏れる情報は多々あるぞ」

通常とは異なる文様をした赤い目がオビトへと向けられる。

「はい。父（……）の死体は既に火葬し、うちはの墓に埋めました」

基本的に木の葉の忍が死ねば、関係者などで葬式を開くのだが、うちは一族はその少ない例外でもあり、皆、密葬されることとなっている。

「で、フガクを殺したのはどこのどいつだ」



「父を殺したのは霧の忍刀七人集のうち、三人だそうです。尤も、三人とも既に死んだそうです。三人目との戦いで深手をおったせいで、医療部隊の治癒も間に合わず、俺が病院に付いて間もなく」

それでも破格だろう。如何にフガクが強かったかが、再認識される。

普通、対1でも大変だろうに、それを三人となれば流石と言わざる終えない。

「フガクの眼は？」

「こちらに」

イタチはそう言うと、ビンに入った二つの写輪眼を机においた。オビトはイタチの手が震えていることに気がついたは、あえて触れなかった。

怒りと憎しみ。幼少に父を手にかけてオビトもだが、イタチもまた。その最後を看取ることになったのだ。経験談的に声をかけるべきではないと判断した。

オビトはビンを手にとると特に集中することなく、異常に気がついた。

この写輪眼は瞳力を失っている。

イザナギを使用したということだろう。それも二回。

「……この写輪眼はミコトさんの元へと返してやれ。お前もしばらくは休暇を言

い渡す。そうだな。ミコトさんが出産してからひと月ほどしたらまた働いてもらおう。  
いいな」

「はい。失礼いたします」

イタチは写輪眼を回収するとそのまま部屋を出て行った。

これで一つ手足を失ったと共にやる事ができた。

火の寺は後回しだな。とスケジュール帳に記載し、他にもやろうと思っていたt o d  
oリストに横線を入れ消していく。

この事態に四代目も動くだろう。とは思うのだが、どう動くかが分からないのでこっ  
ちはこっちで動くとする。最終的に、川の流れのように合流すればいいだけである。

ああ、ストレスで吐きそうだ。

そこからの一週間は怒涛の勢いだった。

まず、警邏隊が再編成されることとなり、再編成された警邏隊が正式稼動するのは四

代目が正式に火影になってからだ。

正式に火影になるとはどういうことか。つまりは顔岩が出来上がるということである。火影になるにはご意見番などからの推薦を得て、それを大名が認証し、上忍の信任投票、そして顔岩が作られる必要がある。

既に四代目は信任投票を得ているので、後は顔岩を作るだけなのだが、それにかかる時間がひと月ほどだろう。なんせ、位置が位置であり、大きさが大きさだ。

ちなみにこの顔岩の作り方なのだが、実は様々あり、その多くは似顔絵を見ながら作ったりするのだが、より、本人に近づける方法として、顔の型を取って模型を作る方法もあり、四代目はクシナによって顔を粘土に叩きつけられるという被害に合っている。

オビトがしたのは顔岩完成を早める用指示し、トドキを使って、間接的ながらも次のうちは次期当主に警告し、さらに警邏隊から数名上忍の忍を引き抜いた。

ダンゾウの真似と言ってしまえばそうなのだが、帳の人間は全て呪印で縛る様にした。

さらに四代目風影・羅砂に岩隠れへの牽制をお願いする親書を送り、岩隠れの警備と

暗部を削り、雷の国と霧の国の戦線警備へと送った。

オビト自ら、砂隠れの里へと趣いたのだが、どうにもピリピリしていた。加琉羅、つまり我愛羅の母親も既に我愛羅を孕んでいたの、ある意味それも当然だろう。なんといつても風影の妻にして、一尾の人柱力だ。

風影は原作から想像できる人物像よりも聡明だった。まあ、それも当然といえば当然とも言えるのだろうか……。そもそも原作において大戦終了後、大名が軍縮を進めるにも関わらず、国と里を安定させて見せていたのだから。惜しむらくも、影として見るには少し実力不足なのか、大蛇丸に殺されてしまったことと、人柱力に対する知識と認識の間違いがあったことだろうか。後、半年ほどで我愛羅も生まれるのだろうか、それまでに、帳を安定させ、クシナから尾獣を陰、陽に分ける方法を学ばなければならぬのだが。上手くいけば、砂隠れに大きな貸しを作れる。

そして、最後にオビトは母の万華鏡写輪眼を受け取った。

浮かないと沈むこともできない。

地下の一室、大蛇丸はマダラの死体をなんやりかんやりしたり、刻んだりして死体がペースト状になるのではないかと思われるほど研究していた。

既に死体から柱間細胞も抜き取り、手こずってはいたが培養も始めていた。そんな時、帳からの使者と名乗る者が大きな棺桶を引き下げてやってきた。

「薬師カブトを？ 駄目よ、あの子にはカカシに匹敵する才能があるのだから、こちらで育てるわ」

そう言った大蛇丸の目に、オビトに使者として遣わされたトクマは怖気が走るが、オビトから大蛇丸が拒否した時のためのメツセージを受け取っていたので伝えた。

「薬師カブトを渡せば、この棺桶の中身をやる。」と

「見せなさい」

大蛇丸は棺桶を受け取り、中身を検める。中にはオビトが大量に手にいれたゼツの死体が入っていた。大蛇丸はそれを一目で特殊な物だと見抜き、そして、これまでの流れからそれが柱間細胞に関わるものだと感づいた。

「それと、数があるので量が欲しいなら高値で買え、と」

「……つくづくちゃっかりしているわね、あの子。いいわ、連れて行きなさい。ある分は全て買うとも伝えなさい」

「は、はい」

トクマは逃げる様にカブトを迎えに行った。大蛇丸はそれを見送ったあと、呟く様にいった。

「まだ何か隠しているわね」

それがなんなのかは分からない。しかし、オビトという忍を考えると大蛇丸にとつて有益なものをまだ隠していると考えられる。大蛇丸はそれがなんなのかを調べようとはしなかった。なぜならば、大蛇丸の知るオビトは普段の奔放な振る舞いからは考えられないほど強かで、容易く悟られるような真似はしないからだ。また、そんなことを調べる暇があるならば研究を進めるべきだと考えたからだ。

岩隠れとの和平はなつたらしい。それが、オビトがシカクから執務室で受けた話だった。元根の忍で手練のテラとダジムに命じて、ノノウの回収もしているとのことだった。

「ん、んー。シカク、ノノウと後でトクマが連れてくるカブトを綱手姫のところに連れて行つてください。医療忍術と体術を教え込む様に、と」

綱手は未だ里におり、今現在は戦線及び、医療活動を離れ、医療忍者の育成をしている。それもこれも、全ては血液恐怖症のために。

すると、コンコンとノックがあり、トクマがカブトを連れてきた。

「初めまして、カブト。俺が帳の暗部長、オビトだ」

「お世話になります」

カブトは丁寧に挨拶をする。オビトは頷くとソファへと座る様に促し、自らも対面の位置に座る。

「さて。本来ならば、君とノノウ、あ、マザーね。二人共を孤児院へと戻してやりたいとこののだが、幸いではなく、災いの君には才能が、ノノウには実力がある。大蛇丸は変態だが、人の才能を見抜く眼は確かだ。

もし、君が木の葉の忍になり、ノノウも説得してくれるならば、俺は孤児院への資金を現状の半分、つまり1.5倍に増やしてもいいと思つている。これは既に火影にも打診し、許可を得ている。後は君次第だ」

どうする?とカブトへと尋ねる。

「マザーや孤児院の皆には会えるの?」

「無論、休みは自由に使うといい」

「じゃあ、やります」

即答に近かった。覚悟自体は出来ていたのだろう。

「よし。シカク、後は頼んだ。あと……」

オビトはソファを立ち、机の引き出しから一枚の書類を出し、シカクへと渡す。

「委任状？」

「おれは少しの間、木の葉を離れる。その間の帳の指揮はお前がとれ」

じゃ、というオビトは執務室を出て行った。後ろでシカクが何か言っているが、全て無視した。

こんこん、とミナトはペンで机を叩く。

今回、オビトが持ってきた話には色々考えざるを得ない。それほどまでに厄介事だった。無論、駄目だと言うのは簡単なのだが……。



「小国にいる岩隠れの人柱力を狩りたい……か」

「はい。とある人物につけていた影分身が発見しましたので、チャンスかと。今は田の国にいたので、岩隠れに情報が漏れにくいですし」

「うーん。オビトは分かっているとと思うけどさ。尾獣は大国同士のパワーバランスを保つものだからね」

「しかし、それは初代の時代のみの話といえます。現状では雷の国と水の国のみが尾獣の制御に成功し、むしろ、尾獣によりその秤は傾いています。写輪眼を持つ俺ならば尾獣のコントロールすることもできますし、火の国が尾獣の制御を怠っている風と土の国の盾となることでバランスを保つことになります」

ミナトはそれはそうなんだけどね。と言う。しかし、岩隠れとの和平はなつたばかりであり、それにヒビを入れる原因を作ることにもなりかねない。忍の世、情報を隠そうとしても漏れるリスクは決してなくならない。

「ん。分かった、いいよ。ただし、木の葉が関わった証拠を残さないようにね。額あても預かせてもらう。写輪眼を使うなどは言えないけど、服装から渦のマークと木の葉のマーク、それにうちはのマークも外して任務にあたってくれ。あと、連れて行くのは一人、できれば同年代の女性にしてくれ」

どこにでもいそうな男女のカップルを装えということだろう。しかし

「いえ、今回は一人でいくつもりです。尾獣を相手では人数を揃えてもダメでしょう。はつきりいって並みの忍では足でまといにしかありません」

尤も、相手にするのはあくまで人柱力であり、尾獣ではないのだが。

「ん。いいよ。死なない様にね」

「俺を殺せる相手なんてそうはいないですよ」

オビトはミナトに額あてを渡すとそういって火影室を出る。

さて、猿狩りだ。

## 料理は下準備が大事

オビトは自分の家へと戻り、戦いの準備をしていた。実は帳の暗部長になった際には母とは別居し、自分の家を買った、もとい、借りたのだ。

今回は忍刀は持っていない。正直、熔遁使い相手にあまり役に立つとは思えない。なんといつてもセメントにゴム、拳句の果てには溶岩だ。また、猫ばあに呆れられる結果になりかねない。

とはいっても、時空間に入れては置くのだが。正直、時空間は既に武器庫になっており、ベットなんかも置いてあり、冬場なんかはそこで寝泊りしたほうが快適なのだが、招集なんかがあるので、実際にはそこでは暮らせないのが実情だ。

それはさておき、今回は団扇をもっていく。ようやく使い方がわかってきたので、利用させて貰おう。

更に鎖付きのクナイを何本か。基本的に使わないが、あるのとないのとでは違う。さて、綱手姫に小言を貰いに行くか……。

綱手に会いに行つたオビトは地面に正座して、綱手からの文句を聞いていた。基本的に大蛇丸と違って綱手とは交渉のしようがない。それに交渉するまでもなく綱手は面倒見がいいので、今回のことは特に気にする必要もないだろう。

小言を聞いている振りをしていたら、綱手が拳を振り上げた。

「人の話をちゃんと聞きけ！」

振り落とされた拳にオビトは反応できず、オビトは地面をもんどり打つ。いくら神威が自動発動の術とはいえど、それは万華鏡写輪眼の状態の話だ。オビトとて普段から写輪眼状態なわけではない。

しばらく、もんどり打っていると、シズネが治癒をかけてくれる。

「やりすぎですよ、綱手様！」

「人の話をちゃんと聞かないからだ」

「助かりました、シズちゃん」

「誰がシズちゃんか！」

今度はシズネに殴られる。尤も、綱手と違い手加減がされているが。

実はシズネとオビトは言わば同期だ。オビトが繰り上げ卒業してそれ以来だったが、視力低下に伴い綱手に診てもらっている再会して以来の仲だった。

「そういえば、オビト。お前、大蛇丸と仲がいいらしいな」

「ええ、まあ。色々、一時は教えを受けていましたから、お慕いしてますよ、崖から背中を押したいくらい」

「つまり、嫌いなわけだな」

いや、まあ。と頭を掻きながら机においてあるお茶を啜る。

「本当は関わりたくないんだけど、あの人利用価値がありすぎて困るんですよね」

オビトの言葉に綱手もシズネも微妙そうな顔をする。え？え？と二人の顔を見比べながら考えるが、なぜそのような顔をするのかオビトには見当もつかない。

「はあ。分からないならいい。それで、本題はなんだ？用もなく来るほどお前も暇ではないだろう」

「ハハハ。まあ、暇はもらいましたけど。シズネ、少し外してくれ」

「はあ」

シズネはそう言うのと部屋を出る。しかし、内容が気になるのも事実だ。シズネは耳を扉につけて中を探る。本当に機密な話であるのなら、怒られるだろうが、二人共が気がついていて何も言わないと言うことは大した用でもないということだ。

「————しゃ——と——を——しよ——さい。そーと——

ん——た——ち——い——」

ほぼ、何を言っているかわからなかった。

しかし、写輪眼と聞こえたような気もする。

扉へと向かってくる足音を聞いて、少し扉から離れる。

出てきたオビトはシズネに隠業が下手すぎるとだけ言って、膝をつかせた後、スタスタと去っていった。後に残ったのはシズネにほんんと手を置く綱手の姿だった。

その後、オビトは大蛇丸の元へと向かっていた。先にゼツを売っぱらって、チャクラ刀を注文しておきたいのだ。

大蛇丸のところについたオビトは時空間からゼツを出して、金を受け取る。金は予想以上に多く、これなら3本は作れるだろう。

ひーふーみー、と金を数えていると大蛇丸が近づいてくる。

「オビト。私につけている暗部は外しなさい。出ないと、……身元不明の死体が見つかることになるわよ」

オビトは金を数えていた手を止め、につこりと微笑む。

「身元不明の死体が出てきたら、大蛇丸さんのせいにして、報復として殺しますよ……」

オビトの眼は既に万華鏡写輪眼になっている。オビトが本気になれば、飛ばす方の神威で時空間に飛ばし、餓死するまで放置すると言う手も取れる。

オビトが戦闘に対して絶対の自信のある理由の一つだ。勿論、視力の下がりかひどいのでやりたくはないが。

「ま、いいじゃないですか。蠅が飛んでいても実害があるわけではないんですから」

オビトはそう言うと、数えるのを諦め、金が入ったトランクを取り込み、部屋を出る。かなり優秀な暗部を使っていたのだが、まあ、それも大蛇丸の前では形無しである。

その後、猫ばあにチャクラ刀の作成の依頼の手紙を出し、オビトは里を出た。まさか、準備だけで一日かかるとは思わなかった。

## 自分が考えることは相手も考える

人柱力戦、オビトが取った作戦は実に単純。奇襲で戦闘力を下げたから、敵に堂々と打ち勝つというものだった。

これが水影やビーならば話は別だが、相手は尾獣と和解できていない老紫だ。そこまで綿密に策を練る必要はない。

それに綿密に策を練るとは同時に僅かなミスで作戦が一気に崩れるということでもあり、余計なリスクはおうべきではない。

故にオビトは老紫を先回りして、起爆札を伏せて、地面へと隠れ潜んだ。

老紫が来たことを見計らい、起爆札を起動させるが、老紫はそれを跳んで避けた。

オビトは地面から出て、老紫に向かって豪火球の術を放ち、自身も豪火球の影ならぬ光に隠れて老紫に向かって飛ぶ。老紫はそれを空中のまま、口から土遁・剛隸式の術を出して防いだ。しかし、オビトは神威で剛隸式と豪火球をすり抜け、老紫に近づいた。オビトが左手にクナイを持っているのを見て、老紫は首と心臓、それと脳を両腕でかばうが、オビトは右手で老紫の腹に手を叩き込んだ。



## 五行封印の術。

尾獣のチャクラを一気に使えなくなる様にした。これは大蛇丸がナルトに対して使った方法だ。

更にオビトはクナイを振って、それについていた鎖を老紫へと巻きつけた。

## 秘術・石針の術。

本来は相手に針を刺し、それにチャクラを流して動けなくする術だが、オビトでは単に出力が足りず、鎖で縛り、そこからチャクラを流すことでそれを可能とした。

二人は地面に着地した。だが、老紫は雄叫びを上げ、持ち前の腕力だけで、鎖を引きちぎった。

「まじか!？」

なり立ての上忍くらいなら身じろぎ一つできなくなるはずなのだが、流石は人柱力というべきか。いや、おっさんになってから人柱力として選ばれた老紫をここでは褒めるべきだろう。基本的に人柱力は子供が選ばれるものなのだから。

老紫は、そしてオビトも印を組む。両者は共に寅の印を最後に組む。

うちは一族として、火遁の打ち合いは望むところであり、オビトは神威で相手の無駄打ちを狙うのではなく、術合戦に持ち込むことにした。

火遁・豪火球の術  
熔遁・岩熔弾の術

オビトの豪火球は熔遁の圧倒的な質量に押され、僅かに熔遁の速度を落とすにとどめ、豪炎をまとった火山岩はオビトへと向かってきた。

オビトは背中の中の団扇でそれを受け止めた。団扇はチャクラで構成された火山岩を吸収し、風の性質へと変化させる。オビトはそれに火遁をたして、老紫へと返した。

うちは火炎返し

風の性質、つまり風遁を足されたオビトの豪火球はマダラの豪火滅却に匹敵する威力で老紫へと飛んでいく。老紫は地動核の術で、自身がいるところを沈め、豪火球を躲した。

しかし、厄介な相手だ。鎖を引きちぎる腕力に本来うづくまるほどの痛みが伴う封印を受けて耐える精神力、そして、封印をされても尚感じる尾獣のチャクラ。おそらく、尾獣のチャクラを自らに還元できるような封印式を使っているのだろう。熔遁を使えるのも、その封印式を利用していることだろう。

脳内での相手の実力をあげる。三忍とは言わないがピンゴブックでいえばA級だろ

う。アスマで言えば20歳くらいで3500万両、オビトで言えば7000万両、大蛇丸なら1億2000万両、四代目なら二億万両だ。無論、実力だけでなくその地位や一族の貴重性も含めた賞金額だが。それで言うな5、6千万両くらいだろう。

和解はしてないとは言え、人柱力だ。四尾の気まぐれで幻術をかけても無力化されるかもしれない。気絶させてから縛るべきだろう。

にしても、熔遁の印は寅だということが、オビトにとつて驚きだった。てつきり土遁の巳だと思っていたのだが。

火遁でクナイに刃を纏わせて構える。今度は両手に、だ。両足と両手を斬り落とせば少しはおとなしくなるだろう。

両手のクナイをクロスさせる様に斬りつけるが、老紫はゴーレムで防いだ。それに対しオビトは裾から毒煙玉地面に落とした。煙が二人を覆い隠したが、オビトと老紫は共に後ろへと跳び相対する。

しかし、老紫の足首の健がいきなり斬られる。老紫のすぐそばの足場には地面からオビトが手首だけを出して健を斬ったのだ。

相対していたオビトは鎖を投げつけ左手に巻きつける。地面に潜んでいたオビトもまた地面から飛び出して右手を鎖で縛り、反対側へと跳ぶ。

そして、神威で団扇を背負った本体が地面からスルッと老紫の目の前に現れて団扇で

老紫の腹を叩いて気絶させた。

倒れた老紫の両腕を後ろに回し、縛り、封印札で封じる。

その状態にしてから神威で吸い込んだ。可能ならばこの場で人柱力になってしまいたいところではあるが、準備が必要だ。少なくとも写輪眼の移植はしなければならぬ。

それに鍵の無い状態で封印術を特にはそれなりな規模の術が必要になる。オビトは自らも時空間に飛んで、俯けだった老紫をひっくり返す。そして、封印式を調べようとしたところで、いきなりボンッと煙を立てて、老紫はゴム人形へと変貌した。

「え?」

「E?」

二回ほど疑問符を上げてからようやく正気に戻る。

「融通・分身だ?!?いつの間に」

ゴムの足には斬られた跡がある。つまり、タイミング的には毒煙の時か、あるいは地動核の術の時ということだろう。

分身にも関わらず斬られても消えなかったのはおそらくゴムだからだろう。本来、影分身などには実体はあっても肉体はない。それ故に傷つくと消える。しかし、これにはゴムという肉体がある。故に簡単には消えないということだ。

「ち、ちくしよー！！！！」

つまり、オビトはまんまと老紫に逃げられたということだ。オビトは八つ当たりにご  
ムを焼くと、しばらく膝をついて落ち込んだ。

## 規模に応じてリスクは跳ね上がる

落ち込んでいたオビトだが、いつまでも落ち込んではいられない。すぐに追撃に移らなければならぬ。現実に戻ってから印を組み、五行封印の位置をあさる。田の国を出て、土の国に戻るつもりか……。

神威で一瞬で移動し、老紫の道を遮る。

「貴様、執拗と狙いよって。何奴だ」

「今更問答を行うつもりか？おまえはここで殺す」

クナイで斬りかかるが、老紫は煙玉を使って目を暗ます。老紫は特に攻撃を仕掛けるでもなく、移動を行った。

「逃げきれると思ってるのか？」

オビトは老紫を追い、クナイを投げる。老紫は木を盾にしながら逃げ進む。

オビトは団扇にチャクラを込めて、更に片手印で豪火球を発動させ、団扇の風遁で煽る。

老紫はそれを地面に潜り、そのまま逃げた。

地中にいられては手出しがしづらい。オビトは舌打ちをすると、地中の老紫を追う。

どうせ、土の国までチャクラが持つわけがない。このスピードならば2、3日かかる。しばらく進み、田の国を出ると、老紫は方向を変え、北へと進み始めた。

北？北？

「鉄の国かよー！」

侍に助けを求めるつもりだろう。侍は忍の世には不干渉とはいえ、助けを求める手をはねのけるほど彼らは冷徹ではない。しかも、パワーバランスである人柱力ともなればなおさらだ。

舌打ちをすると覚悟を決める。印を組んで、地面に手をつける。

土遁・開土昇掘

山ではなく、ブロックを大きく地面を浮かばせて、そのまま宙に放り上げる。これで、もう逃げられない。オビトは左目の神威を限界まで拡張すると時空間へと取り込んだ。これで、2〜3週間ほど放っておけば抵抗できないほどに弱るだろう。

しかし、問題が生じる。

「左目が………見えん」

そも、30?の物体を飛ばす負荷などこれまで経験したことがない。左目が失明する

のもある意味当然といえ、当然である。量のチャクラを使用した開土昇掘と神威のせいでチャクラも空っぽである。

のろのろと歩いて敵と会ったらほんとに困るので、神威で木の葉まで飛ぶ。自分のベツトにどかりと倒れ、泥のように眠る。

「ばしゃ、と顔に水をかけられてオビトは目覚める。視界の半分しか見えていないがそこにはバケツとカカシの姿があった。

「ひでえ起こし方しやがる」

「お前が前に俺にやった起こし方だぞ。しかも、特に用もないのに」

「そういうえば休暇をもらって暇になったからそんなことをした覚えがないわけでもない。」

「だが、俺も水をかけた覚えはない。」

「俺がやったときにはお湯だったはずだろ」

「お湯じゃなくて熱湯だっただろ！」

火傷するほどではなかったからお湯と言って問題無いはずなのだが、そんなことはど



うでもいい。

「で、なんのようだ？」

「招集・・・かかってんぞ」

外を見れば小鳥かこんこんと窓を叩いていた。

「すげえな、ミナト先生。俺まだ帰ってきたって報告してないんだけど」

「いいから急げよ」

そういうとカカシは瞬身で姿を消した。オビトはわしゃわしゃと髪を掻くとのっそりと動き始めた。

「遅いよ、オビト」

火影室についたオビトはミナトに窘められてすみませんとだけ言う。他の上忍の後ろにならんだ。

「ん、揃ったね。じゃあ、本題に入るけどもうすぐ中忍試験があるから推薦する忍がいるものは書類を渡すから三日以内に提出してくれ」

なるほど、見慣れない忍が多いとは思ったが担当上忍だったか。ここにオビトが呼ばれているのは帳の担当だからだろう。

オビトは書類を受け取るとその場で提出した。そこにはイタチ、シスイ、カブトの三

人の名前が記されていた。

それを見たミナトはなんとも言えない顔をする。

「僕の記憶が正しければ、この内の二人はまだ下忍にすらなっていないはずなんだけど……」

「記憶違いです」

言い切った……。ミナトを含め、その場の忍は全員そう思った。

「?……?。オビト、君左目見えてないね」

やっぱこの人すごい。オビトは素直にそう思った。

「字がね。少し違うよ」

なるほど、動作に問題がなかったようだが、そこから見破るか……。怪物め!

「俺、今から眼を移植しなきゃならないんで、少し、休みが欲しいんですが」

「いいよ、どれくらい?」

「取り敢えず」

一週間ほど。という。ミナトは領くと許可を出した。どうせ、中忍試験まではしばらくある。次期でいえばサスケが生まれてから半月ほどか。イタチには悪いが休暇は途中で中止だ。

その後、三人ほど推薦をしてから下忍本人に渡す志願書を受け取ってからその場は解散した。

オビトはシスイにイタチと含めて二人分渡し、その後カブトに一枚渡した。

その後、オビトは自分にマダラの写輪眼を回収する際にこつそりとなつてきた柱間本人の細胞、いわば柱間オリジナルを移植してから母の写輪眼を移植し、再び眠りについた。

時空間には老紫がいるので残念ながら使えないので、シカクが俺の世話役である。とは言っても寝て起きて飯食って糞するだけなので、眼が見えてなくても平気である。あくまでも護衛としての世話役だ。ちなみに食事は全て兵糧丸と水である。

チャンスこそピンチ、良いことと悪いことは同時に起こる。

移植してから三日。万華鏡写輪眼が馴染むまで、結局何も起こらなかつた。自らが餌となつて裏切りものをあぶり出す算段だつたのだが、無意味に終わつてしまつた

無論、何も起こらなかつたというのは裏切りものがないということとも言え、喜ばしいことではあるのだが、個人的に、何か起こつて欲しいという気持ちになかつたでもない。なんだかんだで暇が嫌いなのだ。

くるくると包帯を解きながら、オビトへ洗面所へと向かつた。パツチリと目をあけて鏡を見る。そこには波紋模様の薄紫色の眼が写つていた。

「……………あちゃー。まだ夢の中だつたか」

オビトは顔を洗つて夢から覚めることにした。ぱしやぱしやお湯で顔を洗い、タオルで顔を拭いてから再び鏡と対面する。やはりそこには波紋模様の眼が写つていた。

「……………なんで?」

なぜ、オビトは自分が輪廻眼に目覚めたのかわからなかつた。輪廻眼の開眼条件は千手とうちはの両方の力を持つことだと思われがちだが、あれは黒ゼツが碑石に刻み込

んだ嘘であり、真実は六道仙人が告げたように、インドラとアシユラのチャクラだ。オビトは柱間オリジナルを移植しているので、アシユラのチャクラを持つているとは言えるのだろうが、インドラのチャクラは持ってない。

そこまで考えたところで、いくつかの場面写が移り、オビトは一つの可能性に気づく。そう、荒唐無稽な話ではあるが。例えば、チャクラは繋ぐ力だ。なら、オビトがマダラを封印した際にオビトのチャクラをたどって、マダラの魂に憑依していたインドラがオビトに憑依したという可能性である。

これはオビトにとって最悪に近い可能性である。オビトは元々、輪廻眼に目覚めるつもりなどなかったし、その必要性すらなかった。それになにより、オビトの目的の一つである。兄弟喧嘩を止めるという目的が難しくなる。

オビトがマダラを封印したのは大蛇丸がマダラを穢土転生しないようにするためではない。マダラの魂ごと、インドラを封印することによって転生を防ぐためだ。そうすることで、アシユラの喧嘩相手を奪ってしまい、喧嘩を無理やり止めようとしていたのだ。

しかし解せない。仮にインドラがオビトに取り付いたとしても輪廻眼に目覚めるのが早すぎる。インドラはマダラの時に輪廻眼に目覚めている。ならば、その経験から次の個体であるオビトを輪廻眼へと開眼させたというのが自然だろうか？

どちらにせよ、達成したと思われた目的が復活しただけの話だ。ナルトを殺すつもりはないので、自らが死ぬ時に魂を封印してしまえばいいだけだ。やることの一つが後回しになった程度、大した問題ではないと自らに言い聞かせ、オビトは再び、動き始めた。まず、抜き取った自らの写輪眼を確認する。当然、それには瞳力がない。どのような原理かは知らないが移植すると、万華鏡写輪眼は力を失いようだ。まあ、眼孔から離れても、チャクラによって眼球とはつながっているのかもしれない。どちらにせよ、これはもう使えない。これは実験材料の一つとして綱手に渡そう。

そして、オビトは輪廻眼に目覚めることによつて得た新たなる力を解き放つ。

それは僅か三秒の出来事。

一手でカカシの元へと飛び、一手でカカシの意識を奪い、一手でカカシを抱え、一手で綱手の元へと飛んだ。

天ノ道

一言で言つてしまえば一秒を10秒にする力。

無論、弱点はある。使用可能時間は五秒。そして、その後オビトの過ごした時間から元の時間を引いた時間は能力は使用できない。つまり、五秒使えばその十倍の50から元の5を引いた45秒の間、能力は使用できない。尤も、神威のすり抜けがあるのでそ

の程度の時間稼ぎはいくらでもできるのだが。

だが、この力があっても、オビトがミナトに勝つ方法は時空間に取り込んで餓死させるというものしかない。それほどまでに波風ミナトという忍は規格外なのだ、或いは完成している。

雷影がミナトをあそこまで評価したのも納得できるといふものだ。

いきなり現れたオビトにポカンとしている綱手にオビトはカカシを引き渡した。予定通り、カカシに写輪眼を移植するためだ。本来はカカシに判断させたのだが、フガクが死んでしまったので、予定を変更した結果だ。

綱手にカカシを引き渡した後、オビトは家へと戻る。すると、猫ばあがよこしたであろう大鷲が荷物を抱えて待っていた。鷲の胸元にある手紙には刀の代金が書かれており、正直、大蛇丸からもらった金は一瞬にして消えてしまった。

箱の中には二本の刀が入っており、一本は所謂打刀。光の反射を抑えるために必要最低限の刃のみを研いだ、黒刀である。とは言ってもチャクラ刀ではあれど、特殊なものではない。忍が使う刀というものは、そのほとんどが黒い刀身をしている。むしろ、カカシの持つ白光の刀の方が珍しいのだ。

そして、もう一本は大太刀に分類される、長巻である。振る、薙ぐ、突くと汎用性があり、打刀がサブアームだとすれば、長巻はメインアームである。

くるりと長巻きを一回転させて、ブンと振る。その剣圧だけで僅かに床が割れた。

オビトは金が詰まったトランクを大驚に持たせ、帰らせた。オビト本人は散財が趣味とも言えるので、これで貯金はすっからかんだ。また、短冊街で写輪眼を使ってスロットをする必要が出てきたので、オビトは小銭をもってそのまま家を出た。



陰と陽を足して、陰陽ができあがる。

オビトは今、ゲンマとライドウ、それにアスマを相手に刀を握っていた。とは言ってもただの演習である。カカシを綱手に任せたオビトは短冊街へと向かおうとしていたのだが、ミナトに見つかり、暇なら手伝ってくれと頼まれてしまったのだ。

飛んでくるクナイを刀で叩き落として、アスマと斬り結ぶ。三合でアスマの握っていた刀を弾きとばし、援護に入ろうとしたライドウを蹴り飛ばす。更にゲンマが放つてきたクナイを、最初の一本を掴み取り、残り二本を掴んだクナイで弾く。

その隙を狙ってゲンマが接近する。オビトのクナイを持った腕を身体に押さえつけ、空いた脇腹を抜き手で突こうとするが、オビトは刀の柄頭でその手を叩く。

「アスマー風！」

ライドウとアスマが印を結び、火遁と風遁を放つ。ゲンマは腕を押すようにしてオビトの膝に足を乗せ、飛び跳ねるようにその場を離れる。

火遁・豪炎

風遁・大突破

風遁が足された豪炎は巨大な火炎となってオビトに襲いかかるが、オビトは冷静に口

寄せを行う。

口寄せ・羅生門

巨大な門で火炎を防いだ。とは言っても十分に熱くはあるが。

オビトは門の死角に隠れ、土遁で地面に潜る。

三人ならんで門へと警戒しているところを右から順番に地面に埋めた。そして、三人の生首が出来上がった。

よっこいしょ。と真ん中にいたアスマの頭に座って休憩する。

「オビト、重い」

「まだ中忍といえど、三人とも情けないな。それでも護衛小隊かよ。カカシとまでは言うつもりはないけど、もう少しできるようならうぜ」

「お前とカカシが別格すぎるんだよ」

ゲンマがそう言ってヘタれる。言っていることは分からないでもない。確かに同期のなかでもオビトとカカシは別格かもしれない。しかし

「中忍だからって上忍と戦うこともあるんだから。そんなぬるいこと言ってるなよ」

戦いにおいて、敵は選べない。特に、里のトップである火影の護衛小隊であるならば全ての敵を迎撃しないといけないので尚更だろう。尤も、あのミナトに護衛が必要かと

聞かれれば不必要だろうが。むしろ必要なのは小姓であり参謀だろう。

アスマからパクったタバコを吸いながら休憩しているとアンコと紅がやってくる。

「なにやってんの？あんたら」

「休憩中。それ、団子？俺にもくれよ」

オビトはアンコから団子を受け取ると自分が啜っていたタバコをアスマの口に突っ込むと団子を食べ始める。

「ところでアロマ」

「人をストレス解消法みたいな名前で呼ぶな！」

「タバコもアロマと言えなくもないんだぜ？ところで、そのタバコ糞まずいんだけど、どうしてくれるんだよ。これは口直しにすることをおごってもらわないと困るな」

「あ、あたしも行く」

「おごるのは決定なのかよ。んな金ないし！」

「昨日給料日だろうがよ！」

オビトはそう言うときアスマを地面から引き抜き立たせる

「どうする？嫌なら、また埋めるけど、ロープで縛ってから埋めるけど」

「分かった、おごる。だからやめろ。埋めるのはやめろ」

アスマは諦めながらもそういうと、ゲンマとライドウを引き上げる。ライドウとゲン

マはアスマの肩を叩きながらゴチになります。という。アスマは二人にチョップすると、逃げようかと考えるがすぐに諦める。なんといてもオビトがいるのだ。絶対に逃げられない。

ヘタをすれば他のものも奢らせられる。ここは妥協しておとなしくすることをしておくべきだろうと、考える。ゲンマとライドウはともかく、くノ一二人とオビトの三人おごるくらいなら大した出費にならないのだから。

その後、オビトたちはアスマにしろことをおごらせた後、それぞれの修行に戻った。

斬！と木を切り裂き、更に二つの手裏剣が木を貫く。

「で、できた」

嘗て、柱間が考案した体術奥義・超火遁幻術斬り大手裏剣二段落としの術。

刀に火遁を纏わせ、相手に火の揺らめきを利用して視覚的幻術を掛け相手を縛り、そのまま火炎を纏った刀で切り裂き、操手裏剣の術で大手裏剣を操り、一発二発と叩き込む技である。一体どれほどの意味があるのかわからないが、威力は中々である。

子供の発想だったのかもしれないが、一対一なら幻術が決まった時点で並みの忍なら殺せるので案外いい術かもしれない。

今日はスロットの予定だったがミナトのせいで予定が狂った。少しスロットをしてあまり意味がないので、その予定は明日に回した。最近、あの店にスロットに行く店員さんがいい顔をしないのだ。前に、いちやもん付けられたときにつまみだろうとした警備員をボコボコにしたのが悪かったのだろうか。

そう考えていたら、後ろから手裏剣が飛んでくる。それを忍刀で弾くと上から声が聞こえる。

「千鳥!!」

右手に雷遁を纏ったカカシが木を伝って突っ込んでくる。写輪眼で千鳥に込められているチャクラを見て、それに合わせて螺旋丸を発動させる。

「螺旋丸!」

千鳥と螺旋丸が相殺され、互いがそれぞれを吹き飛ばす。

「つて」

「とつ」

地面に足をつけていたオビトはその場でたたらを踏んで、カカシは木に着地する。

「おう。似合ってるな、その写輪眼」

とんとと地面に着地してカカシはオビトを見据える。

「今の、四代目のだよな」

「おう。写輪眼なら真似できんぞ。それに千鳥も完成したようだし」

「おかげさまでな。せめて一言欲しかったが」

カカシの左眼は写輪眼となっており、目尻の横の肌がしわしわとなっている。

オビトが綱手に移植を頼んだのは写輪眼だけではない。その消費チャクラを抑えるために、柱間細胞も移植させたのだ。

「よし、使い慣れるために。今からサバイバル演習でもするか！おまえは常に写輪眼を維持して、実戦でどれくらい使えるか。ちゃんと把握しろよ」

オビトはそう言うのと煙玉を地面に叩きつけるとその場から消えた。

そこから深夜までカカシとオビトはサバイバル演習に勤しんだ。

## 一寸先は霧 ぱーとー

オビトとカカシが修練に勤しんだ次の日。木の葉は慌ただしく動いた。

早い話が霧が波の国を落としたのである。

「火影様、波の国が落とされたと聞きましたが」

「ん、それについてはこれから方針を話すからみんなが揃うまでは待つていてくれ」

この時、オビトだけがその場にはおらず、戦線へと赴いていた。厳密には波と火の国境に。オビトは神威があるから火影の次に機動力のある忍だ。時空間にいた老紫は既に殺され、尾獣はツボへと封印されていた。早い話が輪廻眼に目覚めたので不要になったのだ。人柱力になることのリスクを考えれば尾獣の力など、輪廻眼を手にしたオビトには必要ない。

オビトは帳を引き連れ、国境に赴き、陣をひいていた。ミナトにより先に話を聞かされ、霧を境界として、火の国への進行を遅らせるように支持されていたのだ。また、波の国を取り戻さないのはそれが不可能であるからである。

皆が揃ったところでミナトは説明に入る。

「皆、知っているとは思いますが、波の国が落とされた。駐在していた忍も全て壊走してい

る。霧の里は波の国を落とすために人柱力である水影を先頭として戦闘に攻め入り、現在は水影が巨大な霧隠れを発生させているために波の国では完全な無視界状態だ」

ミナトはそういうとヒルゼンに頷き、巨大な紙を広げさせる。

「今回、波の国の奪還のために、部隊を再編成する。小隊は四人一組ではなく五人一組で作られ、全部隊に日向、油女、山中、犬塚を代表とする探知タイプを組み込むこととなる。また、忍同士の手信号は使用できないので、音によるモールス信号で交信し、絶対、通常の声には反応しないように」

つまり、普通に助けられてくれと言われても、それは仲間ではないので見捨てろということだ。

「今作戦は水影の波の国からの撤退、或いは水影の殺害をもって成功とする。ただ、水影は人柱力であり、極めて強い。はつきり言つて僕をはじめとする一部の忍でしか太刀打ちできないだろう。故に、水影を見つけた際はすぐに発煙弾を上げてくれ。いいね」

「大蛇丸さんは根の暗部衆を率いて、雷の国への警戒をしてくださいます。油女シビ、秋道チョウザ、日向ヒザシは僕と四人一組を組んでもらう。じゃ、各自、準備が整ったら部隊ごとに集合して、国境に向かってくれ。散!!」

各々が動き出した。そして、それは霧隠れの忍も同じだ。



水影自ら趣いた波の国では民が集められ、今後の方針が発表されていた。

「今回、水の国がこの波の国を制圧したが、我々はここを属国として扱うつもりはない。波の国と火の国の国境に砦を作り、そして、その時、波の国は水の国に吸収合併することとなる。そしてその際、大名が住まう首都は波の国と水の国の国境に移され、その恩恵は波の国にも渡り、皆の生活も楽なものになるだろう!!」

波の国の各地で演説が行われ、波の民をそれを歓迎していた。この大戦の後爪が残る中、生活が楽になるのならばそれを拒絶する理由はないのだから。

### 口寄せ・並列羅生門

30を超える羅生門がズラリと横に並ぶ。

「取り敢えず、これを擬似的な砦にしよう」

かなりの消費チャクラではあったが、すつからかんになるほどではない。オビトは力リカリと兵糧丸をかじりながら、テントへと戻る。

「ダンゾウ、今回の件、どう思う?」

「さて、な。おそらく波の国を取り込むつもりだろうが、言うては悪いが策がずさんだ。

おそらく、他にも何か手を打ってあるのだろう」

ダンゾウは引退こそしたが、この業界から完全に消えたわけではない。所謂、相談役として木の葉に残っていた。

相談役とは補佐とも違う形であり、火影の相談役がコハルとホムラ、根の相談役が火影を引退したヒルゼン、そして、帳の相談役がダンゾウだ。今回、オビトはダンゾウも連れてきていた。というより、ダンゾウを相談役に任命したのがオビトなのだ。ダンゾウの木の葉を思う気持ちは本物であり、それをもつたいないと思っただのだ。

「火影様はどう手を打つつもりなのか……。どちらにせいよ、俺たちは勝手に動くことを許されないだろうな」

「オビト、お前ならどう動く」

「俺なら、帳を引き連れ霧の里に乗り込んで、女子供を殺すな。現在の戦力を削ぐことにはつながらないが、10年、20年先につながる」

オビトがそう言うのとダンゾウは喉を鳴らして笑う。

「やはり、おまえは似ておるよ。カガミに、そして儂にな」

嬉しくねーと呟くと、テントにトドキを始めとする数名の忍が入ってくる。中には拘束された、霧の額あてをした忍もいる。

「海からこちらを探ってる忍がいたんで捉えました」

簡素な報告に頷くと、コツリコツリと歩み寄る。

「霧の忍だな。功を焦ったか？」

男二人と女一人の三人一組。三人ともがオビトと同年代に見える。

忍刀を振って、男二人の首を落とす。水影への報告は必要だろうと女を生かしておいたのだ。

「男の首は晒しておけ、ないとは思いますが霧から何人か出てくるかもしれん。．．．．．さて、お前は水影への伝令として生かしておいてやろう。命の代わりに名を名乗れ」

女はこちららをにらみ殺さんとするほど睨んでいたが、諦めたように俯き、小さな声で名乗った。

照美メイ、と。

## 一寸先は霧 ぱーと2

「メイ？」

なぜだろう。どっかで聞いたことある。霧隠れの忍つてほとんど出てなかったし、こいつ、もしかして水影か？なんか、原作で水影水影呼ばれてたからちゃんと言前は覚えてないんだが。

そう思いながらオビトは手に持ったままの忍刀を弄ぶ。正直なところ、オビトは後に水影になれるだけの實力を持つであろう目の前の少女を斬つてしまいたかった。

しかし、既に命の代わりの名はもらっているし、部下の前で敵とはいえ約束を破るのは信用に關わる。それに舌の根も乾かぬ内に約束事を破るといふのはオビトの信念に反する。里の繁栄のために万事を尽くすという忍道を優先するか、或いは自らの信念を優先するか、悩みどころではあったが、オビトは部下との信用関係も里の繁栄に役立つと考え、メイは紙一重のところまで死を免れた。

「水影に伝えろ。道は千載不滅なり。いかなる大敵でも、道には勝てぬ、とな。我ら木の葉の忍は忍世界のパワーバランスを保つために道理から外れぬ行いはしてこなかった。ここで水の国がそのバランスを崩さんと動くのならばその先にあるのは滅びのみと知

れ」

滅びとは水にとってだけではない。それは忍世界の滅びにつながる。避けられぬ定めとして第四次忍界大戦が巻き起こるだろう。そして、その時勝つのは木の葉だ。仮に、三国の大国が手を結んだとしても水を取り込んだ木の葉の方が方がいいのだから。それに、侍が忍に不干渉とはいえ、大戦の後に残る泥沼を考えれば、義に厚い木の葉に力添えするのは想像に難くない。

しかし、それは木の葉にとって尤も望んでいない結末だ。なぜなら、五大国でにらみ合っていたほうが、木の葉が大陸を統一するよりも犠牲が少ないからである。だからこそ、初代火影・千手柱間は尾獣を配り、バランスをとったのだ。もし。犠牲の天秤が逆に傾けば、おそらく、柱間は尾獣の力を使い大陸を取っただろう。

オビトはトドキに顎で指示を出す。

連れていけ、と

腕を掴まれ、メイは外へと連れられていく。メイの才能を考えれば、そのうちにでも霧で頭角を表すだろう。もしかしたら、会うこともあるかもしれない。オビトはそう考へ、名を名乗った。

「俺の名はうちはオビトだ。強くなったお前と相對するのを楽しみにしている」

姿はもう見えていないだろうが、聞こえはしたのだろう。敵意は感じた。

「敵に塩を送ったな、オビト」

メイが出て行ってからオビトにそういったのはダンゾウだ。ずっと、とお茶を啜ってからオビトはダンゾウへと返す。

「俺が送ったのは塩ではなく、味噌だよ」

「尚、たちが悪い」

ま、なんだ。とオビトは甘味をつまみながら続けた。

「バランスを考えれば、敵もある程度育てないといけないからね。今の水影が強いつてもずつというわけじゃないしね。四代目同様に、な」

ダンゾウが黙ったのを看取ると、オビトは再び甘味に手を伸ばす。しかし、その手が甘味に触れることはなかった。

「報告します。木の葉より、波の国攻略のための部隊が到着しました。また、火影様も今回が出るようです」

「ご苦労。俺は単騎で出る。トドキ、テラ、ダジム、トクマは四人一組を組んで、火影と合流しろ。ダンゾウ、防衛ラインの指揮は任せる」

オビトは長巻を持つとテントを出る。そして、神威を発動して霧へと突入した。

霧の濃度は異常なほどで、自分の手すら見えない有様だった。オビトは仕掛けてきた霧の忍を殺しながら、或いは躲しながら霧の形状から推測される水影の位置へと向かっていた。

その時、また一人の忍がオビトへと斬りかかってきた。オビトはそれを長巻で防いだ。そして、防いでから気がついた。

「なんで、俺は防いだ？」

本人は気がついていないが、それは経験から基づく行動。長巻とそして、相手の忍刀がせめぎ合っているその場所だけが、僅かに霧が薄くなっていた。

僅かなシルエットだけでオビトは相手の忍刀の正体に気がついた。

「鮫肌か！」

弾くように後退したオビトは再び構える。

「忍刀七人集、西瓜山河豚鬼だな」

問いかけたオビトにとっても予想外ではあるが、返答は返ってきた。

「いいえ、彼はうちはその戦いで死にましたよ。生憎、まだ無名の忍ではありませんが、私は干柿鬼鮫といえます。以後、お見知りおきを」

オビトにとって西瓜山より聞き覚えのある名前であったが、それどころではない。

「以後があればの話ですが」

後ろから聞こえた声にオビトは長巻で答える。神威を纏った長巻は、雷遁でも防げないものなのだが、それはあっさりとは驚くと鮫肌によって防がれる。

こいつ、神威でも食えるのか、と驚くと同時に気がつく。高確率で鮫肌の攻撃をすり抜けられないことに。鮫肌は触れなくともチャクラを削る事ができる。ならば、神威に込められたチャクラを食われれば、すり抜けは出来ない。どんな術にもリスクはあるという名言をオビトはこの時再確認した。



## 一寸先は霧 ぱーと3

無音暗殺をする気もないのか、轟音を伴つての一撃。オビトはそれを受け流すようにして防ぎ、後退する。

はつきりいって鮫肌の一撃を完璧に受け流すのは不可能だ。霧があることも厄介だが、何より形状が特異すぎる。

大体の方角ではあるが、豪火球を放つ。手応えなし。

後ろの僅かな水音に反応して思わず印を組むが、水遁ならば神威ですり抜ければ良いと思ひ直し、長巻を握る。

水鮫弾の術をすり抜け、次の攻撃に備えるがどこからも気配を感じない。両手に握っていたのを片手に直すのを見計らうように足元から鮫肌が突き上げられる。オビトはとつさの判断で顔への直撃こそ防いだが、腹のあたりを僅かに削られ、出血する。

「痛つてえ」

神威を得て以降なかなかない痛みに思わず声が漏れる。腰に巻いてある蝦蟇の油を傷口に塗り出血を止める。これは蛙を口寄せにしていたときに得たものであり、オビトは戦争のレベルの戦いではよく、すぐに塗れる様に蓋もせず腰にぶら下げているもの

だ。

ちなみに、奈良家でも似たようなものを売っている。こちらはムカデが原材料らしく、売れてないらしい。

背後からの振り落としの攻撃を水面に片膝をついて両手を掲げるようにして防ぎ、足払いを放つ。水面において、忍の足はチャクラによって水と反発している。そのため、水上戦では足払いは極めて決まりやすい。

片膝をついたまま、あたかも投げるようにして長巻を鬼鮫の顔へと叩き込む。

「鮫の顎の力は凄まじいな」

全体重を乗せたわけではないにしても、そこそこの力はこもっていたはずなのだが、その一撃は口で止められた。

鬼鮫は寝転んだままの姿勢で、右足で鮫肌を蹴るようにしてオビトにぶつけに来る。当たった状態でそのまま引けば鮫肌はオビトを削れるだろう。武器の特徴をよく理解していると感じされる一撃だが、オビトは神威で時空間から刀を取り出し、左手のみで防ぐ。

そして、右手を長巻から放し、螺旋丸を鬼鮫の腹へと叩き込む。

鬼鮫は水の中へと逃げ込み、その一撃を緩和した。

オビトは追撃を行おうとするが、渦潮が発生し、水中の鬼鮫の姿を捉えられない。水遁・渦潮隠れの術である。

はつきりいつて最悪だ。何が最悪かって長巻を持って行かれた。

水中にあるものを探すのにどれだけ人員がいると思っただ、あの鮫やろう。オビトは次の手を打つことにした。何かって？

無視して先にいくことだよ。

はつきり言っつて相性が悪いし、水上じゃ水遁は使えないし、水遁でも勝てないし、火遁じゃ水遁に勝てないしと、これ以上戦う理由がない。

オビトは忍刀だけでもってさっさと陸地に戻った。

しばらく走っていると川につく。水面歩行の業で渡ろうとして、この霧の秘密に気がついた。

波の国には川が多く存在する。水影は川の流にチャクラを込めることによつて広

範囲に霧隠を発生させているのだろう。実際、川にはチャクラが流れている。となれば、目的地はひとつだ。すべての川の発生源となる河口の海。そこに水影はいるはずである。

オビトの記憶では川の入口は北にあるはずだ。オビトは北へと歩を進めた。

しかし、すぐにその足は止まることとなる。

（オビト。いのいちだ。今、通信機の準備が整った。すぐに水衆瀑布へと向かえ、既に火影様と水影の戦いは始まっている）

（え？河口じゃねえの？）

（奴ら、川の分岐点のところまで新しく川を引いたらしい。その川自体はせき止めたからしばらくすれば霧は晴れるが、火影様はそのせいで孤立している。相手もかなりの数と質らしい。とにかく神威で飛んでくれ）

（了解）

オビトはそう言うのと神威で水衆瀑布へと飛んだ。

そして、そこはまさに激戦区といった有様だった。

## 一寸先は霧 ぱーと4

既に水影は尾獣化しており、見た限り、忍刀が四人。更に、有名無名合わせて20は超えている。それだけを相手にして未だ生きている四人は流石と言わざるおえないが劣勢には違いない。ミナトは既にながまぶたを呼んでおり、チョウザもまた超倍化している。

オビトは隠すのをやめ、輪廻眼へと眼を変化させる。忍刀の一人を万象天引で引っぱり、クナイで心臓を貫いた。

そして、瞬身の術で四人一組に合流する。

「オビト！遅いよ」

「急いできましたって。で、どうします？撤退しますか？」

「いや、ここに打って出るよ」

ミナトはそういうと飛雷神で移動していった。オビトは二人に挨拶だけすると、飛んでくるクナイを神羅天征で弾く。

「シビさんはヒザシさんと一緒にしてください。チョウザさんは火影様の援護と三尾を抑えてください。俺は数を減らしながら援護します」

オビトは神威を行使して、数を減らしていく。しかし、減らない。むしろ増えている。視界の端に見えた尾獣玉を飛ばし、飛んでくるクナイをすり抜け、ヒザシたちの元へと向かうやつを火遁で牽制する。

そして、後ろからの一撃を刀でいなして首を刈りにしく、のを阻止しようとしたクナイをすり抜け、相手の体をすり抜けてからジャンプして回転しながらクナイを投げる。さらに目のあつた忍に幻術をかけて、足元に落ちた毒煙玉を跳んで逃げる。

毒煙玉はオビトにとって相性最悪だ。なんといつてもすり抜けられない。物理的接触ダメージがないだろう、それに息を吸い込む際に一緒に来るので、すり抜けようがない。オビトが逃げる姿から何か感じたのか毒煙玉の量が増える。

オビトは炸裂する前に煙玉を神威で飛ばし、さらに神羅天征で敵を吹き飛ばす。

(思ったより押されてるな、火影様は)

戦況は悪くないが決定打が足りない。飛雷神があるから攻撃こそくらくらっていないよのだが、このままではジリ貧だろう。

(ここが正念場か・・・)

オビトは天ノ道を発動させる。更に神威でもある。

一人二人と首にクナイを突き立てていく。その場にいた霧の忍16名が僅か五秒で、

或いは五十秒で全滅した。

「ラストオオオ!!」

地爆天星で作り出した小隕石を水影へと叩き落とす。大きさは尾獣よりは小さいがそこそこの大きさだ。

豪風に轟音を伴って、その一撃は水影へとあたる。しかし、ダメージこそ入ったが水影は未だに健在だ。

「硬いな・・・」

流石は亀とでも言うべきなのだろうか。

オビトは更に大きな隕石を作ろうとするが、水影はそれに突っ込んでいった。オビトはとっさに神羅天征で吹き飛ばそうとするが、僅かに弾いただけで、オビトも僅かに下がる。

水影が着地する前にミナトが大玉螺旋丸を叩き込むが、甲羅にはヒビすら入らない。

ミナトはオビトの横に飛んでくるとクナイを構える。

「オビト、輪廻眼のことは聞いてないよ」

「なんでもかんでも言う訳無いでしょう。ていうか、今それどころじゃないですよね。

あれ、硬すぎますよ」

お互いがにらみ合いになるが、チョウザが横から超倍化のまま肉弾戦車で突っ込む。しかし、亀に乗り上がるだけで、ダメージはない。

だが、チョウザは甲羅の上で回転を止め、そのまま乗り、動きを抑えた。

「チョウザ！ひっくり返せ」

オビトの声に反応して、チョウザは尻尾のほうの甲羅を掴んでひっくり返そうとするが、三本の尻尾が大地を掴んで、返せない。

「悪いが、そう簡単には行かないぞ」

水影はそういうと、水を吹き出しながら回転し始め、そのまま宙にうき始める。

「ガ〇ラかお前は!!」

「何それ」

「いえ、なんでも」

水影は回転の勢いを乗せて、巖の様なしつぽをチョウザに叩き込む。チョウザの体格ではそれは避けきれず、しつぽの攻撃を受けてチョウザは吹き飛んだ。

「オビト、神威で真つ二つにしたりできないのかい？」

「チャクラが足りなんで無理っす」

これまでの戦い十天ノ道と神威の併用によりオビトのチャクラは既に雀の涙ほどだ。はつきり言ってすり抜けるのもそろそろ辛くなる。



「オビト、俺が水の国にマーキングしてくるまで、繋いでおいてくれ」

ミナトは倒すのを諦めて、一先ず、波の国から水影に強制退場してさせるつもりらしい。

いや、無理です。とは言えず、オビトは手持ちの兵糧丸を全て食べる。少なくとも、すり抜けの方だけは維持できるようにしないと相手にならないだろう。

「シビさ〜ん！ 蟲で水影の視界を塞いでください！」

そこそこ遠かったがシビに聞こえたようで、虫たちが水影の両目に集中する。目に入っては堪らないと水影も眼を閉じる。

神威を忍刀に纏わせるのはチャクラを使いすぎるので、火遁を纏わせる。甲羅はともかく身くらいは切れるはずだ。

ミナトの足でも、水の国までは半日はかかるだろう。オビトは無謀な戦いに挑むことになった。

思ったのはただ一つ。

やべえ、俺死ぬかも

## 一寸先は霧 ぱーと5

オビトがやるべきは当然時間稼ぎではあるが、とは言うものそれほどの接戦になることもなかった。シビの蟲で目を閉じさせているので今はどちらも攻撃行為には移っていない。オビトはやろうと思えば一方的に攻撃はできるのだろうが、ダメージにまで達しない攻撃などするだけ無駄だ。

木遁か仙術を会得していれば少しは違ったのだろうが、柱間細胞は馴染んでこそのいるが、未だ木遁にいたるほどではない。場合によつては戦争後更に移植する必要が出てくるかもしれない。そして、仙術は実用できるレベルまでは達していない。

(しかし変だ。なぜこれほどまでに水影は悠長なんだ?)

明らかに悠長すぎる。時間が立てば立つほど木の葉は有利になっていくだろう。援軍ももうそろそろ着てもいい頃合だろうし、そうなれば、完全に木の葉が勢いに乗ることとなる。にもかかわらず水影はまさしく亀のようにじっとしていた。

ただただ無為に時間だけが過ぎていく。一刻もすると木の葉の増援もちらほらと来た。

にもかかわらず、未だ水影は動かない。

「そろそろかな」

唐突な一言。それも聞こえるような音量での。

なにがだ？と問おうとしたところでのいちから連絡が入る。

「オビト！まずい情報が入った。水影の後方から霧の忍と思われる反応が多数」

「それくらい想定内だろう」

援軍、伏兵はいくらでも予想が立つ。それこそアカデミーの子でもだ。

「問題はここからだ。北の海から雲の忍と思われる反応が大量に南下している。おそろく雷影や八尾もいるだろう」

（そういうことか）

霧は外交をしない。それは初代の時からだった。だから、雲と手を組むこともないと思っていたのだが、そういうわけでもないらしい。

「水影。霧は外交をしないんじゃないのか？」

「勝手な思い込みだな。必要と思えば里のために何でもするのが里影というものだ」

確かにそうだろう。ミナトとてそれが里のためならばなんでもするだろうし。

「いのいちさん。火影様にすぐに戻るように伝えてもらえますか？」

「了解した」

「それと、大蛇丸さんに雲の里に前進して、可能なら里の防御設備を破壊するように伝えてください。あと、自来也さんと三代目に波と木の葉の国境にある防衛線に向かうように言つてください。それに、ダンゾウに帳全部隊を率いて、ウの書二章二項三時と伝えてください」

「指示は終わったのか？」

目こそ開いていないが、水影の口元が愉快そうに笑っている。

「おかげ様でな。水影ちゃんよ、軍事バランスを崩壊させる気か？下手をすれば第四次忍界大戦になるぞ」

「他里のトップにちゃん付けとは躰のなっていないことだ。だが、そうだな答えてやろう。無論、大戦まで言つてもらつても困るな。戦争はほどほどでなくてはもうからん」

「否定はしないが」

というよりできない。勘違いがないように記しておくが戦争をするのはあくまで国であつて里ではない。つまり、戦争のための金は国から経費として落ち、しかも依頼料まで出る。忍は武器商人と同じで戦争があると儲かつてしまうのだ。当然、里としての

武力が戦争後は少し下がるのだが。

木の葉は戦争をなるべく避けるべく動いているのでオビトもそれに習っているが、あまりに平和だと里が潰れかねないのも事実なので、難しいところなのだ。ちなみに和平を里同士が結ぶのは、国を通す必要性がないからである。あくまで里と国は対等の関係。受けたくないのなら断ればいいし、途中で降りたくなれば国に違約金を払うなり、戦争のためにもつと金がいると国に払えないほどの金を要求して向こうから終わらせろと頼まれるように仕向けてもいい。

そこまで話したところでミナトがやってきた。

「やつとですか、ミナト先生」

「予定の位置とは違うけどね。雷影が来るとなるとオビトだけでは厳しいしね」

「すね。それより、30ほど任せていいですか？綱手にチャクラ回復させてもらってます」

「わかった。急いでくれ」

オビトはすぐに神威で国境防衛ラインの医療部隊へと飛んだ。

「綱手様。チャクラの回復お願いしたいんですけど」

「それは構わんが、戦線は大丈夫か？」

「火影様にお願いといたんで、大丈夫でしょう」

「ミナトか。なら平気だな」

オビトは綱手に背を向けて座ると、眼を輪廻眼へと変化させる。

元来、チャクラを回復させるには時間がかかるものである。それに個人差のあるチャクラを相手に渡すのは変換の効率が悪いのだ。例外は相手が術を使うときに相手を接触を持つ方法だが、綱手は戦場へはいけない。

ほかにもチャクラを一時的に回復させる方法としては兵糧丸などがあるが、あれは姑息療法とでも言うべきもので根本的解決にはならない。

だが、輪廻眼の餓鬼道ならば綱手が変換する必要もなくなにより短時間ですむ。

「じゃ、綱手様殺すつもりで掌仙術をしてください」

「はいよ」

綱手が思いつきり掌仙術を施す。オビトはそれを吸収して自らのチャクラを回復させる。

「も、いいか？」

柱間の孫であるとはいえ、うちのは血と柱間細胞、それに輪廻眼を保有するオビトのチャクラ許容量は綱手よりも更に多い。流石の綱手もチャクラがなくなってきたようだ。

「ok。ばっちり」

無論のこと嘘である。しかし、何十も口寄せに天ノ道、地縛転生を使ったさつきと違って、次の戦いは援軍も到着しており、無茶をする必要性は薄い。戦うには十分と言えるだろう。

オビトは神威で戦場へともどり、時空間から壺を取り出した。可能ならば雲の忍が来る前に水影を始末、あるいは弱らせておきたい。

忍法・口寄せの術

煙が晴れるとそこには、いくつもの黒い棒が刺さった。

オビトと同じ輪廻眼を持ち

四本の尾を持つ

巨大な猿がいた。



## 一寸先は霧　ぱーと6

「四尾だど？」

呆然と呟くように水影はそういった。彼の中にいる三尾が水影に教えたのだ。あれが四尾だと。

「何をそこまで驚いている？うちはマダラが九尾を従えていたことをお前は知らないのか？そもそも、写輪眼とはそういうものだ。もともと、俺のは輪廻眼だがな」

オビトとしては写輪眼の力を水影に教えるメリツトはない。それでも教えたのは眼をそらさせたかったからだ、尾獣を従えさせられるもう一つの力といえる渦巻き一族の力、或いは千手の力から。

「それじゃ、はじめよっか」

オビトがそういうと四尾が印を組む。そして、両の手を地面へとたたきつける。

土遁・岩柱槍

滝そばにいた水影に対して滝底の地面が変化して巨槍となり、腹をうがつ。

「腹も硬いのか」

亀について詳しくもないオビトにとっては予想外なことに亀は腹も硬い。伊達や酔

狂で腹甲とはよばれていないのだ。

ならばダメージが通りやすいのは、前後の足と頭だけだ。手足を切り落としたところで本体にダメージがあるとは思えないがやらないよりましだろう。

いや、埋めるか。

四尾が再び印を組み、地面へと手をぶつける。

土遁・大地動核

人が使うのとは規模がちがう。四尾が使った土遁によって三尾は滝ごと地面に穴をつくった。更に

熔遁・石灰凝の術

四尾の口からは石灰が吐き出され、滝の水に反応して即効性のセメントとして固まる。

オビトは一分以上の時間を待つが出てくる様子はない。人に戻ればつぶされることはないのだろうが、どうやら水影は土遁は使えないようだ。

出てくるには相当の時間がかかるだろう。

「火影様！今のうちに北上しましょう。雲の忍と戦うなら水上のほうが有利です」

「そうだね。全軍！四人一組に組みなおして北上！」

一瞬で部隊が再編成されて北上されていく。

「あの、もしかして予め部隊を組んでいましたか？」

「まあ、オビトならやってくれるかな、って」

オビトはため息を一つつくと、眩くように言った。

—— やっぱ、この人たぬきだわ

忍にとって本来は海上戦など本意極まりないことだ。無論それは木の葉と今まさに相対している雲の忍にも言えることだろう。

水場での戦いは一見雲の有利に見えるかもしれないがそれはあくまで一対一の状況

ならば。

軍団戦においては味方を巻き込みやすい雷遁は非常に使いにくい。それは制御ができて人間でもそうであり、雷は術者の意思を無視して海面を走ってしまう。

その意味合いにおいて木の葉が雲と戦う際に海上を選ぶのは当然のことだ。

だが、しかし、それがそのまま木の葉の有利につながるわけではない。なんといっても相手には雷影がいるのだ。

この場において雷影と正面斬って戦えるのはオビトとミナトくらいのものである。

ちなみに四尾は水影を見張っているのでここにはいない。

そして、互いの状況が状況だけに見合い状態になっている。

「さて、雷影殿。ここで引くというのならばこちらは手を出すつもりはありません。こちらの里に進軍している大蛇丸さんもこちらで止めましょう。返答は如何に？」

「ふん！お前らがここにいるということは水影の策は失敗に終わったということだろう。よかろう、引いてやる。だが、里が万が一にも攻撃を受けることになれば戦争になることだけは覚悟せいよ」

双方利益なしということでは終わりだろう。雲の援軍もなくなれば水影もあきらめざるを得ない。

「撤退する！」

「撤退するよ！」

結果、両軍は引くこととなった。木の葉的にはこの戦い、勝ったといえるだろう。

そもそも木の葉の目的は戦争を回避することだ。目的を果たしたのならばそれは勝利といわざる終えない。

ぞろぞろと互いの忍は引いていく。

「オビト。いのいちさんを通じて、大蛇丸さんを止めてくれ」

「簡単に言ってくれるな・・・」

敵兵であるのならば人体実験に使っても文句はでない。そのため、大蛇丸としてはこの際にアカデミーの生徒を誘拐するつもりだっただろう。オビトが命じた以上、簡単にはやっぱなしとは言にくい。

オビトはやむを得ず、手札を切ることにした。

「いのいちさん。大蛇丸さんに繋いでください。あと、ダンゾウには作戦中止と伝えてください」

万が一、水影を封じれなかった際の第二策。つまり、陸地での戦闘が行われた際の予備策として、戦いが終わった後、雷影たちが帰還する際に奇襲をかけて八尾をさらうという策は必要なくなった。

「水影はどうします。火影様。始末しようと思えば今から向かえば高戦力で戦えますが」

「いや、放置しよう。水影を倒せたとしても、その後、ヘタに戦争になっても困るしね」  
そこで大蛇丸から通信が入った。

「オビト、何のようかしら。いま、雲隠れの里に向かっているのだけど」

「中止です、てへぺろ」

「いまさら？ 悪いんだけど、もう近くまで来てるのよ、子供の一人二人はさらわせてもらうとするわよ」

「だめですって。ちゃんと変わりになりそうな暇のつぶせる情報はあげますから」

「なによ」

オビトとしてはあまりきりたくない手札なのだが、そうも言ってられない。その情報だけでは輪廻眼にはたどり着けないはずだが、なんか大蛇丸だし、根性でたどり着けそうで怖いのだ。

「うちはこの石碑についてです。輪廻眼のヒントが乗っているのでその部分を」

〔……仕方ないわね〕

通信が切れると再びため息をつく。なんか、どんどん切れる手札が少なくなっている。いつそ始末してしまおうかと、頭に浮かぶほどに

ただ、殺しても死ななそうだし、あきらめるとするか。

オビトはそう判断して、この戦いの祝勝会の算段を立て始める。

遠くで黒い玉が天空高く飛んで言ったのはまた別の話である。

## 野菜が食べたいなら焼野菜屋に行け

暗部にとって大切なことは何か？

それは顔を隠すことである。つまり、素性を知られない様にするということ。

結果、口の部分だけない仮面をした忍に焼肉屋は占拠された。

いらつしや、で止まった店員さんの気持ちも察せようというものだ。

席はわずかに足りなかったが、無理やり座り、それぞれが肉を、肉のみを頼んで野菜も頼まず飲み物も頼んで、全員に飲み物が渡った時点でオビトは立ち上がる。

ちなみに、部隊の顔役であるオビトとダンゾウのみが仮面をつけていない。

「えー、今回は祝勝会として焼肉パーティーを行います。費用は全額ダンゾウが払うので遠慮なく食べてください」

「え？」

儂、初耳。といわんばかりの顔をしたが、すぐにあきらめる。焼肉代くらいで士気があがるのなら安いものだ。それに抗議したところで意味がないだろう。

「ちなみ今日は無礼講なので、上下関係なく楽しんでください。何ならダンゾウにビールぶっかけてもいいぞ」



「いえーい！」と帳の面々も歓声を上げる。恨みこそないが腹立つことがなかったわけもないだろう。人間生きていければストレスはたまるものである。

「んじゃ、はじめ！」

オビトがそういつた瞬間、ほぼ全員が立ったり、片膝立ちをしてジョッキを振りかぶり、ビールをダンゾウの方へと飛ばした。

その被害はダンゾウと向かい合うようにいるオビトにも降りかかるだろう。

オビトとダンゾウは打ち合わせをしたでもないのに同じ印を組んだ。

水遁・水牙弾

飛んできたビールは反転し、飛ばしたやつのかげへと叩き込まれる。

「愚かな」

ダンゾウが呟くようにいい、それにオビトも追隨する。

「反撃されないとは言っていないぞー」

オビトはすわり、出された肉を焼き始めた。

肉肉肉肉肉

ひたすら肉が出され、片っ端から焼いて食べていく。

両隣のやつからダンゾウは酒を注がれ、オビトは肉を足される。

正規隊員の中で一番下のオビトはいわばマスコットの立場だ。だが、間違えてはいけない。魔法少女でいうならば某フレットではなく、僕と契約して魔法少女になってよ、のほうである。つまり、悪意はないがたちが悪い。

ダンゾウはダンゾウで隊員たちからは慕われている。怖いのは恐いのだが、木の葉を思う気持ちは本物であるし、何より味方であればこれほど頼りになる存在はそうはいない。

要は二人と御近づきになりたいと思うものは多くいるということだ。オビトもまた、名家から縁談の話がよく来ているし、ダンゾウにはたまに養子縁組の話がくるらしい。

まあ、ダンゾウは志村家本流の人間でありながら跡取りがないからわからないでもない。

そんなことを考えていると店の扉が開き、新たな客が入ってきた。

「無事だったのね、オビト」

「あ、母さん」

ダンゾウがいきなり立ち上がろうとする。だが、しかし、実際には立つには至らず、びくびくと体を震わせている。恐怖による震え・・・ではない。

美菜によってかけられた、限りなく呪いに近い金縛りの幻術である。子音と母音を利用

用しての聴覚からの幻術。オビトですら、かけらほどしか再現できない幻術の極致だ。流石は幻術マスターといったところか。

金縛りと解こうとしている間に美菜は席に近づいてきた。通路側の暗部が何も言っていないのに席を譲る。

美菜はどうも、とだけ返し、ダンゾウの隣に座り、その肩に手をおいてゆつくりと座らせる。

「ダンゾウ様。そう避けることないじゃないですか」

ダンゾウが眼だけでオビトに救いを求めるが、オビトは急いで肉を頬張り、味わっている振りをして眼をつぶる。

「いえ、別に昔のことですからそう恨んではないですよ」

つまりは、少しは恨んでいるということである。オビトが父を殺そうというときに美菜を引き離れたのはダンゾウである。そのことを美菜はわずかに恨んでいた。

手の置かれたダンゾウの肩がみしみしいくらいには。

オビトは三十回噛んだ肉を飲みこむと、ちよつとトイレとだけ言つてすぐさま逃げ去った。

トイレに入る際にダンゾウに眼をやり、幻術を上書き&解くという置き土産を残して。

どうなるかは、わからないが、すくなくともダンゾウにはここの支払いがあるので勝手に店からは出ないだろう。うまく母をなだめてくれよ、とか思いながら、オビトは少しトイレで待つことにした。

やることもなく手持ち無沙汰なので僅かだが、過去を振り返ることにしよう。基本的に過去は振り返らない主義なのだが、今に限り、この焼肉屋に限り、特別だ。振り返ってやろう。

うちはオビトの始まりの物語を

## 忍だ

父と母が任務に出る寸前。オビトは玄関へと付き、ともに砂との戦いに赴く夫婦へと声をかけた。

「いつてらっしやい」

父は驚いた様にオビトを見ると、口元をゆがめた。

「オビトは早起きだな」

「それはどうでもいいけど、いつごろ帰ってくるの?」

まさしくオビトにとつてはどうでもいいことであつた。オビトはいつも八時には寝て四時にはおきるのでこの時間帯は別に早くはない。むしろ、六時ごろに目覚める両親が今日に限つては早起きなのだ。

「さあな? 戦争だからな。三日で帰ってくるかもしれないし、一月かかるかもしれないし。もしかしたら帰つてこれないかもしれない」

父はそういつてオビトの頭をなでた。

「だが、そう心配するな。これでも上忍だ。そうそうに遅れはとらんさ」

「そう……気を付けてね」

ああ、そう微笑むと父は軽く台所のほうへと指差した。

「母さんがカレーを作ってくれてるから食べなさい。食べ終わったらキッチンと片付けて、そこからは自炊しなさい。お金は台所においてあるし、必要なら身代わりタイプのウサギを食べてもいいし」

「わかった」

「オビト。さびしくなったら、友達でも誘って焼肉を食べにいくといい。辛いときは肉を食べろ。父さんも母さんに振られたときはいつもそうして強くなった」

「両親のそんな話聞きたくもねー」

「ははっ、そうか。なら、帰ってきたらゆっくりと聞かせてやる」

父は軽く手を振りながら去っていった。その後母もまた微笑みながら去った。いった。

一人暮らしは決して問題はなかった。前世を足せばおっさんと呼ばれ始める年齢だし、何より父がおいていってくれたお金は毎食外食をしても一月持つほどの額だった。それにオビト自身、どこにお金があるのか知っているのだから、最悪そこから引けばい

い。

カカシにウサギをさばかせて盛大にバーベキューもしたのだが、それはどうでもいいので割愛しよう。

そんな平和な日常だったからオビトにとって父が毒で死に掛けているというのは寝耳に水だった。

オビトは走った限界まで走った。限界を超えたかも知れないと思うほどに、足が悲鳴を上げるほどに走った。

オビトは父をあまり好きではなかった。その理由はいうまでもなく父が人殺しだからだ。仕事だから、殺さなければ殺されるから。理由を挙げればいくつでも敵を殺す動機は出てくる。しかし、それでも日本人的思考の抜けないオビトにとって、それは明らかにマイナスポイントだ。

にもかかわらず。

オビトは走った。

ドアの開いた病室に着いたとき、オビトは頭を斜めに振り続けられるような気持ち悪い感覚に襲われていた。

床は既に崩れているように見えた。否、厳密に言えば父へのベットへと続く四角の升目以外は黒く、闇色に見えた。

見えるのは一部の床と母と父とベット、そして顔と服の認識ができない人のような何か。

ふらり、ふらりと夢遊病者の如く父へと近づく。

父の枕元へと呆然と立ち尽くす。

母の泣き声は遠く



言葉を発しているであろう人らしき物体の声は認識できない。

ただ、今にも死にそうな顔をした父がこちらを見て発する声だけは何を言っているのかわかった。

わかりたくもなかったが、わかった。

「オビト。俺を殺してくれ。そして、お前が木の葉を守るんだ」

「さあ、台の上にある刀で俺の首を刎ねろ」

「さあー！」

今まで認識すらできなかった。台と刀を見つける。己が体ではないかの様に自然と刀を手にする。

しかし、その重さに切っ先はいとも容易く床へと接する。

はて、かつて持ったときこの刀はこれほど重かっただろうか。

自然とそんなことを思った。

自然と腰で刀を支え、腕と背中切っ先を天井へと向ける。オビトの顔は死にかけて、父の顔へと向けられる。オビトの黒い眼を父の赤い眼が交わる。

母の叫びは遠く。消えていった。

その刹那

オビトの刀は

断頭台へと変化した

あ

あああ

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ  
あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

見開かれた眼がただ、こちらをのぞいていた。

オビトの眼は変質を遂げた。

未菜をpushさえつげながらダンゾウはうなる。

これほどの忍は大戦時である今でもなかなかいない。

愛する我が子に幻術をかけ、自分の首を刎ねさせることで己が子に、力を与えた。

そして、ダンゾウの眼は捉えていた。自らがpushさえつけている美菜もまた新たな力を得たことを。

これまで、戦場で死ぬことが忍らしさだとダンゾウは思っていた。しかし、どうだ？  
目の前の男はベットの所で同僚に見送られ、家族に囲まれ、それでもなお、忍らしく死んでいったではないか!?

人のあり方ではない。そう人ではない！ 忍だ！

オビトの父の死に様はかつてないほどの感動をダンゾウへと与えていた。

うちはハンケイ。

その名をダンゾウは生涯忘れることはないだろう。

## 忍は言葉の裏の裏を讀め

葬儀などのために空けられた三日という時間は未菜の頭を冷やすには十分な時間だった。

だからこそ、彼女はダンゾウに平手打ちをすることができた。

——一発、叩かせてください。

幻術使いと名をはせたクノイチとしてはあまりにも小さな願い。だからこそ、ダンゾウはその願いを受け入れた。それで気が済むというのなら安いものだろう。上忍である彼女との間に不要なしこりを残しておく必要はないと。

だから、一発を受け入れた。ただし、それは始まりに過ぎない。

たった一発の平手打ちで彼女はダンゾウを術中にはめた。

ぺしん、となったときにはダンゾウは動けなくなっていた。

初撃・平手打ち

二撃目・顔面への右ストレート

三撃目・倒れこんだダンゾウに対しての胸部へスタンピング

四撃目・足を退かし、左手でつかみ上げ、壁に叩きつける。

五撃目・左頬への右フック

六撃目・同上

七撃目・鳩尾への右エルボー

その後未菜は気が済むまでダンゾウを殴りつけ、仰向けになるように地面に叩きつける。

そして、彼女は言った。慈悲もなく言った。

「もういいお歳ですから、それ、使いませんよね」

右足をゆらしとあげて、思いつきり金玉を踏み潰した。

そしてダンゾウは白目を剥き、気を失った。

未菜をダンゾウを一瞥した後、何事もなかったのごとくその場を去った。

未菜が家に帰ると付いているはずの明かりがついていない。オビトの気配も感じられず、家の中をぐるぐると回っていると一枚の紙を発見した。

「ちよつと出かけてきます。オビト」

「なん…ですって」

まさか、もう復活してもうオビトを誘拐するとは、忍の闇を甘く見すぎていたか。未菜はそう考え、オビトを救出すべく、再び根の本部へと向かった。

そして、その頃オビトは特に誘拐されるでもなく、普通に巨大な亀の上にいた。その存在自体が他国には知られていない亀だが、なんてことはない、神威で高く飛んで写輪眼で見下ろせば巨大なチャクラが自然と見えてくるものである。

ここにある真実の滝であれば、何かわかるかも知れない、と思ったから、ここに来ただけの話である。

結果すでに30分は無言のまま、自らの闇と向かい合っている。戦うでもなく何をするでもなく、ただひたすらに互いを見つめることなく、両者が両者の視界に入っている。無言の空間に耐え切れなかったのかオビト（闇）がしゃべり始める。

「お前さ。ちよつとかえつてくくんない？自分よりも暗黒面に堕ちたやつとの相手するの、ごめんだわ」

その言葉にオビト（より深き闇）がようやく視点をオビト（闇）に向けた。

「お前は俺だろう。なんか、励ましの言葉とかないわけ？」

「そんな言葉はこの世に存在しねえって他でもないお前が一番よくわかってんだろ」

「つかえねえなあ」

「鏡見て来い」

オビト（闇）からすれば相手をする気にもなれない存在だが、それでも自分だ。見捨てるわけにもいかない。自殺されても困るのでとりあえずの方向性だけは、示しておかなければならない。

「とりあえずはアレだ！大蛇丸が穢土転生完成させるまではまって、完成させたら、ナルトみたいに一発殴れば少しは気ははれるんじゃないか？」

「気の長い話だな。まあ、そうしてみるか……」

オビトはそういうと目を開けて精神世界から出た。ここでの用はもう済んだ。神威を使い、木の葉の家へと戻るのだった。

「オビト！もう、どこいったのよ!？」



ああ、そういえば書置きをしていたな。とオビトは他人事の様を考える。

「お母さん、オビトがいらないから、もう心配で心配で！暗部を30人ばかり病院送りにして火影様に怒られたんだからね！」

「ちよ、ちよつと待って！この忙しい大戦時に何やってんの！そりやおこられるだろ」

未菜が言った恐ろしいを超えるおぞましいことに思わずオビトはツツコんだ。

「し、仕方ないのよ。ダンゾウをぼこぼこにした直後だったからてつきり根の人間かと思つて」

なんという、勘違い。この人本当に上忍か？と思つてしまふが、何せ夫を失つた直後のだ錯乱しても仕方がないだろう。

しかし、我が母ながら一体何者なのだろうか？ダンゾウをぼこるとか相当な実力があるぞ。

まあ、どちらにせよ、父を殴るためには生き残るのを含めて実力をつけておく必要があるだろう。幸い、相当な実力を持ち、なおかつ修行を着けてもらえる人間は目の前にいる。

さあ、修行開始だ。

## 師は強し

(突然だが、拉致監禁されてしまったようだ)

オビトはいま、見知らぬ廃墟に縄で縛られ監禁されていた。

よし、明日から本気出す。とまるでニートのような宣言を母親にしたオビトだったが、それは決して気分が乗らないからとかではなく、単純なチャクラの量の問題であり、事実オビトは翌日から修行に励む予定であった。

が、目を覚ませば拉致監禁されていた。

もともと縄抜けをしようとして違和感に気づく。この部屋からは一切の音が消えていた。

「幻術……だよな？」

オビトは未だに縄抜けの術はできないので、そうそうに諦めて手にチャクラをためて、縄に触れ、弾き飛ばした。一度では完全には開放されなかったが、二度三度と繰り返し返せば必然縄は切れる。

体に他の違和感がないのを確かめてから部屋を出ようと扉に近づくが、足元からキュッと音が聞こえ、とっさに両手で顔と心臓をかばう。

すると頭をかばったほうの手に千本が突き刺さる。

「い、殺す気か……」

思わず呟いてから手に刺さった千本を引き抜き、毒が塗っていないのを確かめる。

いや、さて、それよりも音が聞こえたぞ……？

オビトは違和感を覚え、千本を指で弾くが、やはり音はしない。

どういうわけか、は分からないが、どうやらトラップが仕掛けられた修行場らしい。それも、おそらく致死性が仕掛けられている。

写輪眼を発動させ、扉を閉じたまま覗くとチャクラのこもった札が、扉の向こう側に張られている。

オビトは千本を器用に扉の間に刺し、ちみちみと札を扉からはがし、爆発などがしないのを確認してから扉を開けた。

起爆札だった。

たまったものではない。確実に殺る気だ。

オビトは顔を青くしながら起爆札を拾い。暗い道を進んでいく。

当然、チャクラがすぐなくなってしまうては困るので写輪眼は引っ込めてだ。

十字路の近くに行くと気配を感じ、足を止める。それに対して気配の持ち主もやは

り、気配を消す。

パターンA・・・母の仕掛けた幻術。実はなにもない。これが最善。

パターンB・・・敵。これが最悪

そして、オビトにはこの二択しか思いつかない。

どっちかは分からないが最悪を想定して、千本に起爆札をまきつけ、頰利投げる。爆発と同時に突っ込み、敵と思わしき気配に襲い掛かるが、相手も手練。というよりか、オビトと同レベルよりも上。僅か三手で不意打ちの優位性を失い、地面へとたたきつけられた。

煙が晴れ、そこにいたのは

…カカシだった。

カカシもまたオビトを認識し、開放する。

お互いに何かをしやべっているが、何を言っているか分からず、仕方なくオビトは唇を噛み切り、血の文字を壁へと書く。

『なにやってんの?』

カカシもまた、クナイで手のひらを切り、字を書く

『なんか、目が覚めたら拉致監禁されてた』

『お前もか…』

『たぶん、これは修行だと、思いたい』

『うちの母親だな。間違いない』

『父さんも囁んでると思う』

二人そろって項垂れる。なかなか哀愁さそう姿だった。

わざわざバラバラに動いても意味がないので、一緒に移動することにした。

再び十字路に出たところで、前を歩いていたオビトをカカシがつかんだ。そして背中に字を書く。

『匂い、有り、残香。花?』

『花?』

『花。おそろく』

オビトは写輪眼を発動させて前方を見渡す。そこには四つほどチャクラのこもった

札を見つけた。

『札、四つ』

『四つ？方陣罨』

『方陣？』

『範圍指定罨。入る、危険』

方陣トラップとは言わばいくつかの札を貼って、範圍を指定し、対象が中に入ったら発動するタイプの罨である。面から立体まで指定でき、そこそこ厄介な代物である。

カカシはオビトの服を引っ張って引き返そうと伝えるが、オビトはカカシの手を解いた。

『待機』

オビトは神威を発動させて、壁をすり抜け、札を一枚一枚はがしていく。

驚いているカカシに近づき札を見せる。

『爆破』

オビトとカカシは札を二枚づつ持った。何かに使えるかもしれない。

それからいくつかのトラップを解除しながら進むが、利用できそうなものはなかった。

それでも二人で協力しながら確実にすすみ。

ついに一つの扉の前にたどり着いた。

『首の裏、ちりちり』

『俺も』

二人でせーので扉を開き、前方にいた存在をみた瞬間、高速でしめる。

『いた。やばいのいた』

『舌。長い』

『変態で変体がいた』

ふたたびで振り返り、そつと道に戻ろうとすると、二人の方に手が置かれた。

「さっさと入りなさいよ」

「は、い、い」

そこには大蛇丸がいた。

## 第28話

オビトとカカシは大蛇丸の話を聞きながら正座していた。最初は立っていたのだが、話が長く疲れてきたので途中で座ったのだ。

「つまりね。サクモさんと未菜さんに頼まれたから仕方がなく、あなたたちの修行を見ることにしたのよ。まあ、しょうがないわよね。すごい目でこちらを見ていたから」

断ったら殺すと目が語ってたわよ、と大蛇丸は話を締め切った。

さて、それは一体だれなのだろうか。オビトは大蛇丸から顔を逸らしつつそう考える。

確かによくよく考えれば未菜は戦線部隊だ。木の葉に残ってオビトを鍛えることはできない。忍をやめるのもそう簡単ではないし、未だ終わりの見えない大戦時にいきなりやめるなど許されることではない。

そして、当然の帰結として、防衛組の人間に任せるしかないだろう。しかし、如何せん人選が悪いと考えるのはオビトだけなのだろうか？

「で、大蛇丸様。俺たちはまだアカデミーに通ってるんですが、どんな修行をつけてくれ



るんですか？」

カカシが率先して修行内容を聞くが、大蛇丸は僅かに首を曲げ、目線を上へと向ける。「別に特別なことを教えるつもりはないわよ。サクモさんもそこまでいってなかつたし。確か、土台をきっちり作つてほしいって言われたから。チャクラの持つ特性とか、性質とか教えたり、コントロールと体力身につけたり程度でいいわよね」

確かに妥当なところだろう。それ以上ともなると明らかに過分である。

そうして始まった大蛇丸の修行だが、思いのほか語ることがない。大蛇丸の言っていたとおり、基本の修行を延々としただけの話だからである。

だから、ここから語るのは終わりの始まりの物語、或いは始まりの終わりの物語。

とある国、とある里、そこにいた一人の忍が家へと帰り、そして、死んだ話である。

少し前まで国境警備隊にいたその忍は、本日も無事に任務を終え、家路についた。しかし

「今日は外食でもしているのか？」

家に明かりがついていたなかつた。

家の鍵を開け、玄関に入ると何かがおいてある、暗くてよく見えないから、明かりを

つけようと、スイッチに手を伸ばすと、ぬちやりとした感覚が手を襲う、そして、あまりに血生臭いことに気づき、家から離れようとバックステップをした瞬間。

トス、とあまりにも軽い衝撃胸にうけ、男はあまりにもあっさりとその命を失った。

残るのは、赤い眼を持つ復讐を終えたものが一人、そして、その姿も、影も残さず、消えていった。

そこまで思い返したところでトイレのドアがノックされる。どうやら、長いこと一人でトイレを独り占めしてしまったようだ。

過去を思い返すのはここまでにしよう。なぜならば、自分が向かうのは未来でなければならぬのだから。

## 背中を押すのではなく、蹴っ飛ばせ

トイレから店内に戻ったオビトだが、店内には酔いつぶれた忍が多数いることを除けば、未菜とダンゾウがいないことしか、違いがない。

「ダンゾウは？」

まだ酔いつぶれてない忍の一人に尋ねるが、顔を逸らすだけだった。

「ダンゾウは？」

別のやつに問い詰めると、そいつも目を逸らし、ポツリと呟いた。

「ダンゾウ様の件は、残念でした」

オビトはそれだけですべてを察した。

店員に領収書は火影に回すように指示してから、ダンゾウを追うべく、というより救うべく、店を飛び出した。

「ダンゾウー！！俺が付くまで死ぬなよー！！お前は骨が粉になるまで俺がこき使うつて決めてんだからなよー！！」

オビトそういつて時空間へと消えていった。

しばらく里内を探し回り、林の中にダンゾウを見つける。

「ダンゾウ！生きてるか？」

「お、オビトか。助かった。本当に助かった」

ダンゾウは多くの切り傷を負い、目も血走っていた。

ダンゾウほどの手練であれば、未菜がいかに強いといつても逃げ切ることは不可能ではない。しかし、それは逃走にのみ力を注ぎ、一切の反撃はできない。もし、下手に反撃して、未菜が死んでしまったとしたら、今度はオビトに命を狙われる。そして、神威を持つオビトを相手にするとなれば逃げることもすらかなわないのである。

「ダンゾウ、とりあえず、時空間に引っ込んでろ」

オビトはそういうとダンゾウをつかみ、神威で時空間に取り込む。未菜もそのうち酔いが覚めて、家路に着くだろう。

しかし、今回のことで実感したが、やはり、仙術の習得は必須である。

お手軽に仙術を使うための手段は既に完成しているとはいえ、やはり、できれば使いたくないのも本当だ。

両腕は既に呪印だらけだし、胸部には柱間細胞あるし、背中からわき腹に至っても色々仕込んであるし、これ以上入れる場所がない。となれば仙術を入れるにはいくつか抜かなければならない。

やはり、真つ当な手段で習得すべきかとも考えたが、時間はないし。第一真つ当な方法を知らない。何だ。一日中黙想でもしてればいいのか？

ちなみにオビトの中に蛙の里での修行は既がない。あそこは既に立ち入り禁止されている。

そもそも探知能力が問題だ。基本的にオビトの探知の術は攻撃＋感知だ。理由としては当然、味方を探すことより敵を探すことのほうが多いからである。そういったことを抜きにしても今までは力カシがいたというのも理由の一つだ。

基本的にそれに適した人間がいるならその人に丸投げするのがオビトのやり方だ。雇用を生んでいるともいえるが。

ふらふらと帳の本部への道を歩いていると力カシとリンを発見する。なぜか、無意識のうちに物陰へと隠れてしまう。二人は友人だから邪魔してはいけなと思つての行動だ。決して、面白くなりそうだなんで、考えてはいない。

ちなみに物陰にはアスマとアンコがいた。

「なにしてんの？」

「いや、なんとなく。面白くなりそうだな、とは思つてない。な」

「ええ、思つてないわよ」

思っていないのであれば仕方がない。三人仲良く除き見ることにしよう。

「あいつら、なーんですぐにでも引っ付かないんだらうな」

「見てて腹立つわよね」

オビトはちらりとアスマを見てから言う。

「本当にな、多少強引な手を使ってもいいかもしれん」

それはそれとして、アスマの兄に当たるオトマも恋人ができたらしい。

全く将来が楽しみで仕方がない。

いつまで見ても意味がないので、そうそうにアスマ達と別れ、一人、町並みを眺めながら歩く。

やはり、この日常を守るためには国力の増加は必須だ。いつそのこと小国をいくつか巻き込んで風の国と合併するのはありかもしれない。大名を排するか、取り込めばそう難しい話でもないだろう。

シカクあたりを使って計画を練る部隊も作っておこう。いずれ役に立つときが来るかもしれない。

そこまで行くなら鉄の国も入れて大陸を二分するのは視野に入れておくべきか。な

どと考えながら家に着く。よく考えれば家に帰るのは三ヶ月ぶりである。基本的に帳の仮眠室で寝てるし。

家の中に入ると違和感を感じ取る。三ヶ月ぶりの帰宅だというのに、明らかに部屋が綺麗過ぎる。窓のふちに指を走らせるが、ホコリ一つない。

そして、机の上には一つ、巻物がある。中を開くと特殊暗号が記されている。ミナトが作った、オビトを始め、替えの効きづらい特殊かつ有効な血継限界や技術を持った忍、一人一人に作られた暗号で。火影勅命の極秘任務が書かれるときに使われるものだ。

出産のときは近い。

## 第30話

ナルトの生まれる時期が近づいたことで、分かったかもしれないが、サスケ既に生まれてる。一月ほどの休暇の予定だったのだが、思いのほか大変そうなので半年に変更した。そういうわけでイタチがしばらく使えないので、シスイを相手に組み手をしていった。

一般人から見れば十分に速いが、忍からみればゆっくりめの速度で、両手に火遁の性質変化をまとわせ、なおかつ、動かせるのは足一本という縛りである。

流流舞の発展系であり、もし、火遁をまとつた手を手以外で受ければ痛いではすまない。そして、だからこそ、肘や足に注意を払わなければならない、結構な難易度の組み手だ。そしてなりより、シスイは写輪眼を使うことを禁じられている。使ってしまったら意味が半減するからだ。

既に数十分は防いでいるが、とうとうオビトの肘がシスイの肩を突き、後ろ向きにこける。

「シスイは二十分休憩。今の組み手を分析しながら、体を休めろ。カブト、こい」

綱手の元に修行に出していたカブトだが、既に一定の修行を終え、手元に戻ってきた。



水との戦争のときも後方と戦後処理でよい働きをしたらしい。

「行きます！」

「忍がいちいち宣言すんな！」

そういつて組み手を始めようとしたとき、空で鷹が鳴いた。

カブトのチャクラをまとった一撃を手首をつかんで止める。オビトが視線を空に向けたことでカブトもまた追撃を行わなかった。

「どうかしましたか？」

首を傾げているカブトにオビトは手首をひねってこかして答える。

「忍が油断するな」

オビトはシスイに視線を向け、声を上げた。

「訓練修了。午後の修練場の申請を解除しておけ」

そういうとオビトは瞬身の術で姿を消した。

オビトはその後、アンコと合流し、双眼鏡を使って、茶屋にいるカカシとアスマを見

張った。

「どうなってる?」

「いま、注文したところ。もうすぐお茶が出ると思うんだけど」

そう、お茶である。もちろん、睡眠薬が入っている。カカシの鼻を警戒して綱手に作らせた完璧な無味無臭の睡眠薬である。しかも、アスマの分でもある。作戦に引き込んだアスマだが、そろそろ紅との仲を発展させてもいいだろう。とアニコと二人、アスマも嵌める事にした。

二人の下にお茶が運ばれてくる。綱手特製だから心配はしてないが、最悪、二人の前に姿を出して幻術をかけなければならぬ。流星にそれはアニコでは無理なため、オビトが出張ってきているわけである。もっとも、薬を飲ませてもどっちみち、幻術にはかけるのだが。

二人がお茶を飲んだところで様子がおかしくなる。しっかりと効いているようだ。完全に動かなくなったところで、瞬身の術で二人の下に行く。

「よし、さっさとあの場所に運ぶぞ」

あの場所とはもちろん、ご休憩するあの場所である。アニコも含めた三人を時空間へと取り込み、自身もまた、幻術をかけるために時空間へと飛んだ。

「あれ？こんなところで何してんの？」

時空間に入ったオビトが見たのはカップラーメンを啜るダンゾウの姿だった。

「お前が出すの忘れておるからだろう」

「あ、そ。まあいいや。手伝え、ちょうど人手がほしかったところだし」

オビトは指紋のつかないように手袋をした後、ダンゾウにも同じものを渡し、さらに二つの手紙と小瓶を渡した。

「これを紅と野原リンの家にそれぞれ一つずつ置いてきてくれ」

オビトはダンゾウをつかんで時空間から紅の家へと直接送り込んだ。

「さっきの小瓶ってなに？」

「解毒剤、ということになっている」

「ということは本当は違うということだ。一体中身が何なのか気になったのかアッコは中身を聞いてきた。」

「もちろん、媚薬だ。前にミナト先生に盛ったやつ。クシナさんいわく千本の先に着いたやつを舐めた程度で体がめっちゃ火照るらしい。飲んだことないからわからんけど」  
視線を寝ている二人に向けたあと、一つうなづく。

「幻術かけるから自ら呷って口移しで飲まさないといけないし、両方の体に入るから間

違いなく、やることになる」

「えぐいわね」

「ちなみにリンは今日が危険日」

「鬼め！」

ちなみにシズネに幻術で聞き出したので間違いない。

アスマとカカシを掴んでそれぞれの部屋のベットへと直接送り込む。

さらにアッコを掴んでご休憩宿の入り口が見える場所を陣取った。

ちようど小腹が空いたので、ダンゾウの残っていたカップラーメンを啜りながら暇を潰す。ちなみにアッコは人のクッキーを拝借していたようでパクパクと食べてやがる。

しばらくすると、リンが駆け込んでいき、その数分後、紅が駆け込んでいった。

さらにほんの一分後、自来也が現れた。

「ぐふふふふつ、いい取材になりそうじゃのお」

オビトは思わず、自来也の後頭部にけりを叩き込んだ。

「いつの間に帰ってきてたんですか。貴方様のためにたくさん仕事をためておきましたよ」

ブリキのように音を立てながら、自来也は振りかえって、そして固まった。

「どーも」

「お、おびと。いや、わしこれから取材で忙しくなるからのお」

「俺がリンの裸体をあんたなんか見せるわけないだろう？俺も見たことないに  
オビトは自来也の襟を掴むと引きずっていった。

「いやじゃー。もう三徹で仕事はいやじゃー」

「わがままいってんじゃねえよ。あんたほつとくと碌なことにならねえんだよ」  
「儂がやると効率悪いじゃろう！オビト、お前効率悪いこと嫌いだらう！」

オビトは狂相を浮かべると、一切の慈悲なしに言った。

「影分身しろよ」

その後、三日間自来也の姿を見たものはいなかったという。

## 同盟関係ってそんなに大事なかな…

ナルトの出産を後一月程度に控えた今日この頃、オビトは火影の執務室にいた。

「はい、オビト。これがお見合い写真ね」

手渡された写真を見て、オビトは必死に考える。一体誰の見合い写真だろうと。

「あー。カカシの」

「カカシはリンとくつつけたんでしよう？媚薬の件で僕がどれだけクシナに怒られたと  
思ってるの」

「はいはい、ダンゾウの」

「ダンゾウはちよつと年が行き過ぎてるね。というか、彼、未だに見合い写真とか送られてくるの？」

「なるほど、なるほど。イタチの」

「いやいやお見合いするには、まだ若いでしょ」

「……」

「……」

無言のまま牽制しあう二人、ミナトとしてはここで逃がすわけには行かない。正直、

これは政略結婚の面がある。しかし、オビトの言い分はこうだ。風の国とは、win-winの關係であり、同盟も十分強固なものだ。不必要に手を入れることはないだろう。しかも、暗部の長が結婚つて必要か?と。

なぜ、風の国が出たかといえ、そのお見合い写真に写る女性の特徴がどうにも、風影の妻に似ているからだ。おそらくだが、親族なのだろう。色白でなかなかの美人なのはオビトとしても認めざるをえないが、一夜の關係ならともかく、結婚まで行くと二の足を踏まざるを得ない。

「はーまさか、こいつは男でアソコにか!?!」

「違う……」

そうオビトの発想を否定すると、ミナトは今にも使徒か。と呟きそうなポーズをとる。

「オビト、この見合い話は君にだ。正直、この話は多少強引でも通したい。向こうから持つてきた話ではあるが……。こちらとしてもメリットは巨大だ」

同盟關係を強固にするのは、こちらにとつてもメリットだが、砂からすればなおさらだろう。今現在において、大陸最強の里は間違いない木ノ葉であり、その軍力は二カ国相手どれるほどである。しかし、ミナトがいう所の巨大なメリットはおそらくだが、別物だ。一体何かまでは分からないが。

「とにかく！ 考えておいてくれ」

ミナトはそういつて話を締め切った。

部屋を退室して、帳の本部へと向かうオビトだったが、途中、雀が窓をつつき、その存在を強調する。オビトの記憶が正しければ、クシナさんがお呼びのようだ。

オビトは急ぎ、カカシがついているクシナの下へと飛ぶ。

「すまん、呼ばれたんだが」

「ああ、クシナさんから聞いています」

カカシはボディチェックもせずにオビトを通す。しかし、これは当然のことである。そもそも、神威をもつオビトにそのようなことは無意味だ。

中には当然、クシナが一人いるだけだ。出産まで後一月程度。おなかも膨らんでい  
る。

だが、オビトがそれ以上に気になるのはニコニコと笑っている顔だ。あれは恐ろしい



ことを考えているに違いないと、オビトは気を引き締める。

「お久しぶりです、クシナさん。体調のほうはいかががでしょうか。うずまき一族とはいえ、出産は体力を使いますからね。九尾の封印も含めて体調は万全にしておくよう心がけてください。ああ、そうそう、ついこの間カカシとリンが恋人になったらしいですよ。まったくもつてめでたいことですね。一月ほどで、お子さんも生まれるようですし、火影さまにとっては厄年ならね福年ですね。いやはや、木の葉の未来も安泰ですね。おつと、もうこんな時間だ。このあたりで失礼させていただきます」

クシナにしゃべる切欠を与えずに、オビトは部屋を退室しようとする。……が、しかし、扉が開かない。

「オビトなら、話も聞かずに退室しようとするから、ってカカシが気を利かせて、開かないようにしてくれてるの」

「なん……だと」

まさか、カカシに行動を予測されていたとは。しかし、つまりそれは、カカシはクシナの用事の内容をしっていて、なおかつ、それは俺が逃げ出すようなことであるというわけになる。はつきり言って、やばいことさせられる。クシナが頼ってくる場合は、いや、というよりもミナトではなくオビトを頼るといふことは。

「実はね。風影様の奥さんも人柱力らしくて、しかも！今妊娠してるんだって。あつてみたいんだけど、なんとかできる？」

当然、国内ではなく国外の用事ということになる。オビトの答えは当然決まってる。

「できなくはないですが、色々面倒だし、危険もありますよ。こちらから話を持つていく以上、クシナさんが行かないといけません。どちらにせよ、計画を立てて火影様のところに持つていく必要がありますね」

断らない。断りたいという気持ちがおビトの中にないわけではないが、もし、クシナとカアラの仲を取り持つことができたなら、それだけでもある種の同盟関係の強化に繋がるからだ。木の葉のメリットになる話をオビトは断れない。

では、なぜ自身の結婚には二の足を踏むのか。それは、オビトとの結婚という切り札を別のところでも使えるからだ。例えば、敵対関係である大国などである。故に、オビトはこのタイミングで札を切ることをよくは思っていなかった。

機を見間違えれば効力を失ってしまうかもしれないが、少なくとも、手元においておいて損はない。

誠意が一番良い戦術だとか、正直が相手を口説くのに一番だとか。それが通らない状

況を生まないようにするのが腕の見せ所だとか。

どこで知ったかも知れてしまったが、諸外国との外交を司る立場になってからは常に、これを意識して動くようにしていた。

一先ずは、シカクにプランを練らせるか、とオビトは帳へと飛んだ。